

復活

島村抱月

トルストイ 原作

アンリバタイユ 脚色

はしがき

トルストイの小説『復活』(Resurrection)は千八百九十九年の作で、晩年の作者の一面を代表する名篇である。是れが小説として、藝術として、乃至思想教義の宣傳として、社會組織の批評としての研究は、既に種々の人によつてなされた所であるが、その賛否いづれに拘らず、十九世紀末の最も重大な一著作として、世界を動かしたものであることは言ふを待たない。小説と劇とは固より方式を異にした藝術であるから、小説の寫すところが其のまゝ劇になることは困難である。たゞ如何なる程度まで原作の感じ、思想、人物、事件を劇中に生かし得るかといふだけが比較の興味である。従つて小説から脚色した劇の善悪が、原作小説の責任でないことは言ふまでもない。

小説『復活』を劇に脚色したものではありません、フランスのアンリ、バタイユ(Henry Bataille)の作があ

る。私がそれを見たのは千八百三年にビアボム、ツリー (Beerbohm Tree) がロンドンの「陛下座」で其の英譯を演じたときである。

今回の此の脚本はトルストイの原作小説とバタイユの脚本とそれに小改竄を加へたツリーの所演と、三つを本にして更に「藝術座」第三回の上演臺本に適するやう、再脚色を施したもので、大正三年三月二十六日から六日間帝國劇場で演ずる重なる役割の定まつてゐるは松井須磨子のカチユーシヤである。

尚小説『復活』の翻譯には英譯にロイス、モード (Loise Maude) のがあり、邦譯に内田魯庵氏
のがある。

人物

ネフリユドフ（公爵）

シモンソン（國事犯囚）

チホン（老僕）

ファナーリン（辯護士）

陪審長、陪審の商人、同教師、同大佐、同職工組合長、他七人
病院の助手醫、同醫長

看守、押丁、小使、召使、護送兵等

男囚徒若干人

マスロワ（カチューシヤ）（女囚）

フョードシア（女囚）

ミシー（コルチャーギン侯爵家の令嬢）

マリア（國事犯の女囚）

一の叔母、二の叔母（ネフリユドフの）

老女中、若女中

老女囚、綽名大口シヤ、綽名美人、無言の女等の女囚徒

時代

現時

場所

ロシアの田舎、モスクワ及びシベリア

第一幕

第一場

モスクワ市の貴族ネフリユドフの家の寢室の一部、中央下手に寄つて立派な寢臺、正面上手にカーテンをいた窓、上手横に扉、又寢臺の前には見事な小卓、其の上に火の點もつた銀の蠟燭皿が載せてある。夜更けの心持。季節は四月。

ネフリユドフは上等の眞白なリンネルの寢衣をきて寢臺の上にすわり伸べた兩脚に羽蒲團をかけたまゝ、紙巻煙草を吸ひながら蠟燭の火で一枚の寫眞を見てゐる。

ネフリユドフ（生あくびをして）あゝあ。コルチャーギンの夜會もいゝが、あゝ、どうも立てつづけにやられちや、たまらない、第一體がつづかないからなあ。しかし、ミシーは憎くないね。初めの内あんまり持ちかけやうがしつこいので氣味が悪かつたが、今ぢや向うの仕うちも自然になるし、こつちもだん／＼なじんで來たせぬか、いゝ心持で、お相手が出来るやうになつた。ふゝ、ミシー！ ミシー！（寫眞にちよつと接吻して）私がお前さんにきまつた返事をしないのは、お前さんが嫌ひだからぢやないのだよ。私には或る主ある女で、少々困つたのがあるのだ。私の地面内の田舎にゐるのだが、どうしても女の方で切れて呉れない。併しこの頃はまた若い士官に岡惚れして浮れてゐるといふから、今に片づく

だらう。田舎女は思おもひ切りの悪いくせに浮う氣はきだからね、全くいやになるよ。田舎女と言や、あゝ、もう十年からになるが、カチューシャはどうしたらう？ 長い昔の事だね。あれは復活祭の晩だった。さうくあれと二人向かひあつて窓に腰をかけてみると、外は一面靄もやのこめた月夜だった。下の川からは氷こほりの割れる音が聞こえて、遠くの方から復活祭の歌が聞こえる。あの時カチューシャが手拍子を取つて私も一緒に中音で歌を歌つたが、あゝあゝ、もうみんな遠い昔の事だ。明日あすはまたコルチャギンへ行つてミシーのお供で美術館へ行くのかな。あゝく、(また生あくび) 疲れちやつた！ コルチャギン、田舎貴族さいくんの細君の浮氣者、カチューシャ、復活祭の歌、復活祭、あゝく、(寝て枕元の蠟燭皿を取り蠟燭の火を吹き消す、舞臺暗くなる、ダーク、チェーンジ)

第二場

舞臺の眞暗な中から復活の讚美歌が遠く聞こえて来る其うちにパツと明るくなると田舎の別荘の一室に變つてゐる。正面上手に作りつけて寢牀、カーテンがしぼつてある。下手は大きな窓、そこから月夜に遠く雪の景色が見える三月の復活祭の頃で薄い靄もやが一面にこめてゐる趣、時々向うの川の氷の破れる音が聞こえる。室の下手と上手に扉。

女中二人、若い方は寢床を直して居り取った方は窓から外を見てゐる。

老女中 何時なんじだえ？

若い女中 (枕元の置時計を見て) もう十分で十二時ですよ。

老女中 ぢや、もう十分たつとキリスト様が蘇よみがへらつしやるんだね——今夜は何なんていふ氣候
だらう？ 明るくつて、それで暖い霧たが立つてゐるで夏の晩のやうだ。接骨木にはとこの花が
匂におつてゐること！

若い女中 あなたもうおやすみなすつちやどう？ あとは私とチホン爺さんとで十分ぶんですよ。

老女中 いゝえ、私はお歸りまで待まつてゐて復活祭の接吻をしなくちやならないのだよ。瓶の
水だの、タウエルだの石鹼せっけんだのをよく見みてお置きよ。(遠くで此時鐘が鳴る)

若い女中 復活祭の鐘かねが鳴り出した！

老女中 「キリストは蘇よみがへり給たまへり」

若い女中 「キリストは蘇よみがへり給たまへり」

(二人一寸抱き合ふ)

若い女中 若旦那はまたすぐお立ちだつていふぢやありませんか？

老女中 あゝさうとも、明日の朝は是非立つていらつしやらなくちやならないのさ。トルコへ戦争にお出でなさるのだよ、その前にちよつとソニヤ叔母さまとラウラ叔母さまに會ひに入らつしやつたのだから、どんな事があつても、それより長く御逗留は出来ないのだ。それやさうと、カチューシヤは何うしたえ？

若い女中 あれは奥様方と一緒にの馬車で教會のお祭りに行つたのですよ。白い服を着て赤い簪をさして、めかしこんでさ。

老女中 奥様方と一緒にの馬車で？ へん、牛乳屋の私生兒が馬車に乗つてかい！ そして、若旦那さまも御一緒の馬車かえ？

若い女中 いゝえ、若旦那はお着きになるとすぐ、服もかへないで馬でいらつしやいました。此前いらつしやつた時よく運動にお乗り遊ばしたあの年とつた方の馬がお好きなのだよ。

老女中 此前だつて、つい一昨年いらつしやつたのだが、あの時はまだ大學生の帽子を被つて、書生々々していらつしやつたが、今度見ると立派におなんなすつた事ねえ。髯なんかはやしてほんとに立派におなんなすつたよ。

若い女中 (窓の方へ行き) 御覧なさい、もうみんな教會から歸ると見えて、提燈が見え出しましたこと！ あの一番早い提燈が二つ、屹度家の方ですよ。

老女中　ぢやお迎むかへに出なくちや……

(二人出て行く、戸の外で)

一の叔母の聲　さあ／＼、お這はい入り。

二の叔母の聲　氣きをつけておあるきよ。

ネフリユドフの聲　はあ／＼、大丈夫です、よくおぼえてゐますから。

(ネフリユドフと二人の叔母入り来る)

一の叔母　之がお前さんのお部屋へやですよ。すつかり元のとほりですよ。

ネフリユドフ　全く元の通りですね。

二の叔母　あの寢ねどこ牀も、テーブルも、それから神さまのみ像も、みんなそつくり元のまゝだらう？

老女中　(勿體らしく進みよつて)「キリストは蘇よみがへり給たまへり」

ネフリユドフ　(微笑して)さう、さう。私わたしはお前をおぼえてゐるよ。

一の叔母　お前笑つてゐて、何もしないね。軍隊ぐんたいへ這入つてから、神さまの事を忘わすれたのぢやあ

るまいね？ 復活祭にはお前、上下の隔へだてなくみんなが抱き合あって接吻せつぶんするものぢやないか。此の邊ではまだみんな其尊い習慣を守まもつてゐますよ。

ネフリユドフ さうでしたつけね、なに、忘わすれやしないのですがね。ついその、あちらにゐるとあんまりやらないものですからね（室内を見まはして心ありげに）全く何も變かはつてゐませんね。一昨年をとしのまゝですね。それから叔母さんたちまでまだ白髪一本も見えませぬねえ！

二の叔母 變つたのはお前まへですよ。本統ほんとうにこんな立派りっぱな軍人になつて、ちよつと見分みわけがつかない程ですよ。何よりも其髯ひげが立派だねえ。

ネフリユドフ また髯ひげですか？（笑つて）私がこゝへ來きてから一等とうよく聞いたのはキリスト様の復活ひげと髯ひげが生えたといふことです。近衛は中尉になるとこいつを生はやすのが規則ですからね、髯は即ち位なのです。

一の叔母 （寢床みを見て）お前蒲團さむを二枚かけたなら、寒さむくはなからうね。

二の叔母 湯ゆたんぽでも入れてあげようか！

ネフリユドフ いゝえ、叔母おばさま決してそんな御心配には及びませぬ。暖あたたいです。それよりかもうよつぽど遅いやうですからあなた方はどうかおやすみ下さい、さ、早くおやすみ下さい、風かぜでもおひきになるといけません。

(扉を叩く音がする)

一の叔母 百姓衆がお前に復活祭の接吻をしに來たのですよ(ネフリユドフたぢろぐ) 尊い習慣だからしてやつて下さいよ。

ネフリユドフ おはひり。

(一群の農民帽子を手に持ち這入つて來る。先づ神の前に一禮してからネフリユドフに辭儀をする)

農甲 (進み出て) 若旦那さま御無事でお着なさいましておめでたうございます。

ネフリユドフ やあ、今晚は、お前の家はたしか川向うだったね。今晚はお爺さん。私はいつもお前がたの事を思ひ出してゐたよ。今晚は。君にはたしか子供の折よく驢馬に乘せて貰つたつけね。やあ、今晚は、今晚は、今晚は。

甲 若旦那さま、私等みなして復活祭の卵を差上げに参りましたが、斯うして鬱金色に染めた卵でございます、神さまの思召でございますから、どうぞ受けさつしやつて下さいまし。

ネフリユドフ ありがたう、見事な色をした卵だね！さお前から手初めに接吻して呉れ。

甲

(袖で口を拭ひながら) 若旦那さま待たつしやつて下さい。斯うして口を綺麗に拭いて置きますから……「キリストは蘇り給へり」

(ネフリユドフの顔に三度接吻する)

ネフリユドフ それからお爺さん。それから。

(農民交る) 卵を捧げ、口を拭ひ「キリストは蘇りたまへり」と言つて接吻する)

一の叔母 さ、もう、お前は疲れたでせうからおやすみ。

ネフリユドフ はあ疲れましたから、それでは明日、ぢや皆さん、卵をありがたう(農民出て行く、それを戸口まで見送つてあとをしめ)あの大きな口で三度もつづけざまに接吻された時は、観念はしてゐてもちよつと驚きました。硬い髯で顔中引つかゝれるかと思ひました(大股に室内をあるきながら)此の机でしたね、私が一昨年卒業論文を書いたのは、あの時の紫のインキのしみがまだ残つてゐますよ。

二の叔母 さうともお前まへそつくり昔のまゝにしてあるよ。それはさうとお前は明日立つて戦争せんそうへ行くといふことだが、大丈夫だらうかねえ？

ネフリユドフ 大丈夫ですとも、六ヶ月げつたつとまた休暇を取つてやつて來ますよ。そして昔むかしのやうにいろんな面白い本でも読んであげませう。

一の叔母 どうかねえ。では今夜こんやは早くおやすみ、寢牀の仕度はいゝか知ら、(下手の戸口の所へ行つて呼ぶ)カチューシヤ、カチューシヤ！ ちよつとおいで。

カチューシヤの聲 はいく。

一の叔母 (戸の外へ向つて)あのね、私の部屋にある上等の石鹸と、それから新しいタウエルとを若旦那わかだんなさまに持つて來ておあげ。それから、チホンに水差を持つてお出でつてね。

カチューシヤの聲 はい、かしこまりました。

(ネフリユドフはカチューシヤの聲に聞耳を立てる)

ネフリユドフ さあ、叔母さんこれでいよく今夜はお分わかれにませう。どうぞ、おやすみなすつて下さい。荷物ですか？ あれは今にチホンが來たら解といて貰もらひますから御心配には及びません。どうぞ早くおやすみ下ください、私もすぐ寢ますから。

(二人の叔母の手に接吻する)

二の叔母　ではおやすみ。　よく暖かにして、風をひかないやうにおし。おやすみ、おやすみ。

(顔と兩頬とに三度接吻して上手口から出て行く)

一の叔母　明日の朝は乳入りのコーヒーにして置きますよ。ではおやすみ、おやすみ。(之も三度接吻上手口から出て行く)

ネフリユドフ　(椅子に腰をかけぐつたりとなつて)あゝ、これでやつと樂になつた、年寄りといふものは何うしてあゝ諄いのかなあ！カチューシヤは何うしたらう？早く會つて話して見たいものだ。(扉の方を見るとちやうど叩く音がする)おゝ、カチューシヤか？おはひり！(戸口まで行つて戸をあけると、老僕の子ホンが水差を持つて入り來たる)なんだ！お前か？

子ホン　はい、若旦那さま、おめでたうございます。が、あなたさまは、さぞお疲れさまでいらつしやいませう。

(水差を盆に載せたまゝ卓の上に置いて頻りに口を拭ふのを見て)

ネフリユドフ さあ、復活祭の接吻をして呉れ(チホン「キリストは蘇り給へり」とい

て顔に接吻する)私も戦地へ行く前に斯うして皆と會へて實に愉快だよ。

チホン わたく共も、まことにありがたい仕合せでございます。斯うして立派におなり遊ばした若旦那さまにお目にかゝるのでございますもの、長年御奉公の仕甲斐があつたと申すものでございます。

ネフリユドフ こつちではみんな變りはないか？

チホン (行李を解きながら)へえ、神様のお蔭で此の爺まで、斯んなにびんびんして居ります。

ネフリユドフ それからお前の子供も孫も？

チホン はい、みんな息災でございます。それからあのお好きなカメもまだ丈夫でございますし……たゞあの年取つた馬の一つの方、それ御存じでございますか？今夜お乗りになつたのでない方が、去年赤痢に取りつかれて死にましてございます、かはいさうな事をいたしました。

ネフリユドフ さうか？ それはかはいさうだなあ。あゝ、その劔けんは出して置いて呉れ。それからそのリンネルと化粧箱だけ出して置いて呉れゝばいゝ。あゝ、その紙入れをお見せ。其の中にはな、一杯いっぱい、女の手紙だの寫眞だのが這入つてゐるのだよ。

チホン はゝあ、若旦那わかだんなさま、いけませんぜ、いけませんぜ。成程これは可なり重うございますな。

ネフリツドフ はゝ、お前等にはさういふ世よの中は分からないだらう？ な、爺や。

チホン 若旦那さまは、きつい色男におんななさいましたな。へゝゝ。

ネフリユドフ 馬鹿を言へ。これが世間せけん竝なみなのだよ。みんなやるから俺もやるのだ。此の中には或大使館附の武官の妻君から來た手紙があるが、私は其女のために決闘けつとうまでしたよ。

チホン 其女そのをんなのために決闘をなさいましたつて？ へえ！ 若旦那さまもえらい色事師におんななさいましたな。

ネフリユドフ それから此の包と紐とは或ある女優が送つて呉れたものだ。

チホン 若旦那さまはまあ、お變り遊かはばしましたなあ！ つい一昨年までは、まだほんとうの書生さまで、よく理窟ばかり言つていらつしやいましたが……何とかそれ、イギリスの學者でスペンサーとかおつしやいまして、今に此の御先祖からの大地面も財産も小作人どもに、たゞ呉くれてやるやうな事をおつしやつていらつしやつたが……まあ、あれより

は今の方がよつぽどよろしうございます。若いときには女の二人や三人おこしらへ遊ばすのは當り前でございます。いやよく立派な旦那さまにおなりなさいました。斯んな風に軍服を召して髯をはやして……（ネフリユドフの顔を見ると頻りに一枚の寫眞を見てゐる）若旦那さま、それも女衆の寫眞でございますか？

ネフリユドフ カチューシャ！ カチューシャ！

チホン （不思議げに覗いて）……あゝ、一昨年の寫眞でございますな。私も寫つて居ります。

眞中が若旦那さまで、右が大叔母さま、左がカチューシャ其の前に私が坐つてを、カメも寫つて居ります。カチューシャは全くいゝ娘になりましたな、若旦那さま。

ネフリユドフ あゝ、いゝ娘になつたが、今夜はどうしたのか、さつぱりやつて來ないね。

チホン まだ御挨拶にも出ませんか？ はゝあ、屹度恥かしかつて居るのでございますよ。御

主人さまにそんな事があるものか。今に呼んでまゐります。

ネフリユドフ いや。わざ。呼んで來なくつてもいゝから、爺やはもうお寢。遅いからな。もう川はないから。

チホン はい、さやうでございますか？ ではもう御用がございませんなら、これでお先へ失

禮をいたします（また口を拭いてゐるのを見てネフリユドフ顔を差出すと「キリストは蘇りたまへり」と言つて三度接吻して出て行く。ネフリユドフ窓の前へ行き外の景色を見て

みる。戸を叩く音)

ネフリユドフ どなた？

カチューシャの聲 カチューシャ。

ネフリユドフ カチューシャ、さあおはひり。さつきから随分待つてゐたよ。

(カチューシャ祭の白の晴着に赤いリボンの簪をさしタワーエルと石鹼と花束とを持つて這入つ来る)

カチューシャ 御免なさいな。花を揃へてゐたものですから、少し遅くなりましてすみません。

此のタワーエルとね、それから此の匂ひ入りの石鹼は特別に叔母さまからあなたに差し上げるのでございますつて。それから此の花は……、つまらない花しか集まらないのですけれど……でも少しは香ひがございますわ。

ネフリユドフ (石鹼と花とを両手に持ち交る) 嗅いで見て) ぢや、此の花はお前が呉れたのだね。どうも、ありがたう。どうも、ありがたう。さあ、まあ、ここへ来ておかけ。

カチューシャ (恥ぢらふやうに横を向いて) もう遅うございますから、私、行きますわ、おやすみなさい。

ネフリユドフ いけないく。來るとすぐ行かないで、少しの間でいいから話して行つてお呉れ、私わたしなんだかお前に行かれると淋さびしくていけないから。そら、あの枕がまだ袋ふくろにはまつてゐないよ。あれを拵へて置いて呉れなくちや。

カチューシヤ あら、まだでしたか？ いけないわね。私わたし、うまく行きますか知ら。

(寢臺の傍へ行き枕を枕袋に入れようとする。ネフリユドフつかくと寄つて後から其頸に接吻する)

カチューシヤ 何をなになさいますよ？ (振り放して) ……あなた、いけないぢやありませんか？

放して下さいよ、さ。後生ごしやうですから放して下さいよ！ いゝえ、よかありません！ よか

ありません！… (泣く)

ネフリユドフ (手をて放して) 泣いちやいけないく。私が悪かつたから勘忍かんにんしてお呉れ。お前はそんなに私が嫌ひだったのか？ 私はもつと私を愛してゐて呉れると思ひ込んだりつたのだよ。私が戦地へ行く前にこゝまで來たのはたゞお前の顔が一目見たかつた許りでだよ。今日私が初めてこゝの家へ着いた時も、一番にお前まへが玄關まで出迎へて呉れるか知らと、そればかり楽しみにして來て見ると、お前の姿はどこにも見えないぢやないか？ もう

此の家には居ないのだと思つたら胸が一杯になつて了つた。其うちにお前の聲が廊下の方で聞えたものだから私の心臓は一時に動悸がしはじめて、急に家の中が明るくなつたやうに思はれたよ。私はそれほど思つてゐるに、お前は少しも私の事を思つて呉れないのだね！

カチューシャ それは私だつて思つちやゐますけれど、だしぬけに今のやうな事をなさるのですもの、びつくりしますわ。私だつて、あなたがこゝへお着きになつたと思ふと、ひどく動悸がし出して、顔が火のやうにほてつて來ました。そのためになることも出来なかつたのですよ（うつむく）

ネフリユドフ 分かつた。だから私たちは、斯うして誰も居ない所でほんとうの話がしたいぢやないか……恐いことはないから、あそこへ腰かけてお呉れ。さ、お坐り、私決して亂暴な事はしないから。（脊に手をかけて椅子に坐らせる）恐かないよ。

カチューシャ もう恐ありませんわ。
ネフリユドフ ね、さうだらう？ で、さつき教會で、儀式のあつた時は、お前、少しも私の方を見なかつたね。なぜさ？

カチューシャ でもきまりが悪かつたのですもの。

ネフリユドフ あの時お前は全く綺麗だつたよ。一方には燭臺の蠟燭が赤く燃えてゐて、戸の傍

には銀色の袈裟をかけた坊さんが香爐を手に載せて立つてゐる、その真中程に真白の服を着て真黒い髪をしてお前が坐つてゐて、ほんとに美しかったよ。

カチューシャ あなたがそんなに見て下すつたのなら、半分嘘にしても嬉しうございますわ。

ネフリユドフ 嘘なことがあるものか！ さうく此寫眞を御覽、お前あの、一昨年をとしの祭の時の事を覚えてゐるか？

カチューシャ え、おぼえてゐます。

ネフリユドフ 二人一緒に駈くらをしたね。私がお前の手を引いて、一、二、三で駈け出すと、お前の糊のついた下着がガワく音おとがしたつけ。

カチューシャ あらいやだ！ そんな事をおぼえていらつして！ だけどあなたはすぐ駈け越してお了しまひなさいましたわね。

ネフリユドフ あ、それからどうしたつけ！

カチューシャ それから私あの連翹れんぎやうの茂みの後ろへ行つて、駈けることを止めると、ネフリユドフ 私がそこへ行かうと思つて、其の方へ駈け出すはずみに茨いばらの生えてる溝へ落つこ

ちて了つて、

カチューシャ え、あの時は私、どうしようかと思ひましたわ。

ネフリユドフ やつとお前の手につかまつて這ひ上つたが足はぶ濡れで手には引つ掻き傷が

出来てみじめな様だつたね。

カチューシャ でもとう／＼連翹の木の蔭で二人一緒になりましたわね。

ネフリユドフ あゝ、あの連翹の木の蔭！ お前あれを忘れて？

カチューシャ いゝえ、私、あなたの傍へよつて、何の氣なしにあなたの服についてる茨を取つてゐると、あなたは何時か私の上にのしかゝつていらつしやつて私の手をきゅと掴んで接吻なすつたわ。

ネフリユドフ するとお前は驚いて一二間駈け出して、白い花の散りかゝつた連翹の枝を折つて眞赤になつた顔を煽いでゐたね。

カチューシャ だつてひどいのですもの。でも、其爲めに、あなたを怨みなんかしませんでしたわ。

ネフリユドフ あれから私はお前が忘れられなくなつたのだよ。（腰を抱きながら急に立ち上り）お前何も聞こえないか？ あの音は何だらう？

カチューシャ （耳を澄して）ほゝ、あれは女中頭のお婆さんが躰をかいてるのですよ。

ネフリユドフ （笑つて）なんだい、女中頭の躰だつて？ だが鐘の音か何か聞こえるね、（窓へ行つて明け放す）あゝ、好い夜だ！ 潤んで暖かくて……さあ、ここへ、私の傍へお出で（二人向ひあつて窓に腰をかける）春になつたね！ あの月の眞下のところに割れ目の見

えるのは、川の氷だらう？ あの音は氷の割れる音だね。

カチューシャ 春はるになつたのですね！ お聞きなさいよもう一番鶏が鳴いてゐます……氷の砕ける音おとはあの森の後の川かはから聞こえて来るのですよ。

ネフリユドフ 實じつにたまらなくいゝ景色ぢやないか？ 斯うしてお前の手を取とつて此の景色の中なかをいつまでもくあるいてゐたい！ おやく、田圃にはまだ人ひとが大勢ゐるやうだね？

カチューシャ あれは隣り村の人たちが復活祭の火ひを燃やしに來たのでせう。

ネフリユドフ その前まへでみんな歌を唄つてるやうだね？

カチューシャ そしておしまひにお祈いのりを言ふとそれが一年立たない内うちにかなふのださうでござい
ます。

ネフリユドフ お前も一つ歌をお唄ひ。そしてお祈りをして願ぐわんをかけやうよ。ね。

カチューシャ でも、私、できないのですもの。それに叔母さまのお目めをさますと大變ですわ。

ネフリユドフ 大丈夫、低ひくい聲こゑで歌つたらいゝぢやないか。お前の名を入れた歌をお歌うたひ。

カチューシャ さうねえ、ぢや歌うたひませうか？……（ちよつと考へて軽く手を拍ち）

カチューシャ かわいいや

別わかれのつらさ

せめて淡雪^{あわゆき}とけぬ間^まと、

神^{かみ}にねがひをかけましょうか

ジ、ジ、ジジビチツチ

ネフリユドフ もう一度^ど、私も歌ふよ。

(二人して手を拍ち低く歌ふ)

ネフリユドフ さて、歌を唱へば、もう一つ、復活祭の儀式があるだらう？ 私^{わたし}とお前と唇に接

吻すること、今日^{けふ}はみんな平等なのだから。

カチューシヤ いゝえ、それは父親^{ちちおや}ばかりですよ、他人は額に接吻するのです。

ネフリユドフ ぢや、この他人は額をお出し。

カチューシヤ はい。

(すなほに額を出す、それを両手に挟んだまゝ接吻せんとして)

ネフリユドフ でもこんなかはいらしい額ひたいでは、接吻する場所がないよ。だから唇くちびるにしてもいゝだらう？

カチューシャ いけないく。額だけ、（避けんとするのを制してちつと眼を見つめ口をつける、女それを唇うに受ける。しばらくして目のさめたやうに）あゝ。私わたしどうしたのでせう？ いけないく、後生はなですから放はなして下さい。

ネフリユドフ 私はもうお前まへと此ままゝには別わかれられないよ。

カチューシャ （涙聲なみごゑで）でも明日あすは戦地へお立ちなされるぢやありませんか。またいつお目にかゝれるか分からないものを、今夜こんやきりそんな事ことをなすつて、残酷さむくですわ。あゝ、私わたしどうしたらいいでせう？ 私、もう行きますわ、いゝえ、行ゆかなくちやならない、行ゆかなくちやならない。

ネフリユドフ （しばらく抱きとめようともがいて）そんなに言いふならお出いで！

（女を手放して立つ。女はまた男の胸に頭をあて啜り泣きながら）

カチューシャ 私、やつぱり行ゆかれない行ゆかれない。

(ひしと男にすがる其時再びダーク、チューンジ)

第三場

舞臺段々明るくなると、第一場の場面に戻る、早朝の光が窓かけを透して射し入つて来る。ネフリユドフは寢臺の上に眠つてゐる、下手の扉を叩く音に眼をさます。

ネフリユドフ あゝ、古い夢を見たな。(戸の音に耳を傾け) 誰れだ?

召使 コルチャーギン様から急のお使ひでございます。お手紙がこゝにございます。

(寢衣のまゝ起き出て戸口へ行つて手紙を受取り、寢臺に腰をかけてそれを讀む)

ネフリユドフ 「あなたさま昨夜は例の輕受合にて今日美術館へ御同道下され候やうのお言葉、

楽しみにいたし居り候へど、よく／＼考へ候へば今日あなたさまは、陪審官として裁判所へお出でなされる由のいつぞやのお話、萬一其方をお忘れ遊ばしては大へんと存じさつそく文してお知らせ申上候其代り裁判所の方すみ次第私宅へお越し下されたく、御用すみ時刻

第二幕

を見はからひ、私、馬車にて裁判所までお迎ひにまゐり申候、あとはお目もじの上、ミシーより」(読み了つて手紙をテーブルの上に投げ出し)さうく、今日は裁判所へ行くのだつたな馬鹿々々しい仕事もあつたものだ。どれ、もう起きよう。(ベルを押す。)

…幕…

モスクワ巡廻裁判所内審議室、中央に一脚の大テーブル、周圍に椅子、上手に長椅子、正面中程及び左右の横手に扉。

小使甲乙テーブルの上を整理してゐる。

小使甲 今日けふの裁判は何の事件じけんだらう!

小使乙 それ、あの、女郎の毒殺事件よ。知らないのかい!

甲 知らないよ。

乙 あんなに新聞で書き立てゝゐるぢやないか! マスロワといふ女が客の商人を毒殺

した事件じけんさ。

甲 さうかい。

(此時ドヤ／＼と音して、正面の戸口からネフリユドフを始め十二人の陪審官等が這入つて来る。ネフリユドフは顔色が蒼ざめて、今にも卒倒しさうな様子で、他のものに扶けられて入り来り、長椅子に倚りかかる。他の人々は怠屈したといふ風に體を伸したり、息をついたり、煙草を吹かしたり、そこらを歩き廻つたりしてゐる。小使出て行く)

陪審の教師 ネフリユドフ公爵、一たいどうなすつたのです？ カチューシャとおつしやいまし

たね！

陪審の商人 いや、誰でもあゝなると、氣絶きぜつしたくなりますぜ。拙者せつなども少々まゐりました、第一、女が不便びんべんでさあ。あれを罪に落とさうとは、檢事けんじもひどいや、人情が無いといふものだ。

陪審の退職大佐 では君きみ？ この被告を無罪だと主張するのかね？

商人 無罪さ、勿論無罪さ。あれは大佐、竊盜だの人殺だのと、そんな大それた事の出来る

女ぢやごわせん。あの眼を見りやあ、分かつてるぢやないか。

大佐

いや、大悪人といふものは、得てあゝいふ無邪氣な容貌をしてゐるものだ。君はいか
んよ。被告が女だと、すぐ同情して了ふからいかんよ。

商人

大佐、そいつはいけない、女だから同情するといふ法はない。少なくとも吾輩に取つ
てはだね、せめて、美人だから同情すると言つて貰ひたいね。マスロワは全く素敵な美人
だ。ねえ、ネフリユドフ公爵さうぢやごわせんか？

陪審長

さ諸君、どうか席せきについて審議をお始め下さい。要するに問題は簡単です、本年二十
七歳のカテリーナ又はカチューシャ、マスロワがシベリヤの商人スメルコフを、其そのダイ
ヤモンド人の指輪及び所持金を竊取する目的で毒殺した。共犯人の老婆らうばは拘引せられる日
に死んで了つた。被告人マスロワは有罪いうざいなるか、無罪なるか。といふのであります。

教師

僕は、有罪であるが情狀酌量すべきものがあると考へます。

商人

いや、吾輩は無罪放免を主張します。あの女は決してそんな悪事を行ひ得るものでご
わせん、重なる共犯人といふのが死んだ以上、到底動かない證據しょうこは上りつこはごわせん。
罪の疑はしきは何とやら言ふ本文がごわすからな。吾輩は無罪放免を主張しゅちやうします。

大佐

これは怪けしからん、他に二人までちやんと共犯人が出てゐるではないか君。彼等は既
に竊盗をしたに違ちがひないと定まつて了つた。さうだとすると、若もしマスロワが彼等と共謀

しなかつたら、彼等ホテルの傭人どもが金のありかを知らう筈がないではないか？

陪審長　それに被害者の鍵かぎは現にマスロワが預つてゐたのですからな。

教師　それだけでは證據にはなりませんまい。鍵を預つたからといってホテルの傭人どもが、何も他の合鍵を用ひないとは限りかぎますまい。

商人　ヒヤ／＼。

教師　それから、金を竊んだといふが、此の女はその金かねを何所にも所持して居まりません。境遇が境遇だから、そんな大金を盗んだつて、使つかひ道がないのです。隠かくす場所も無いのです。

商人　ヒヤヒヤ。それが圖星ずぼしだ。

大佐　併し指輪もを持つてゐる。

教師　それはたしかに貰つたのだといふ證據があります。

商人　あの指輪はおほづぬけて大きいですね。被害者の身體検査は何どうとか言いひましたね、陪審長？

陪審長　こゝに要點が筆記してあります。丈たけが六尺五寸。

商人　ふうん。見事な男でげすな。

陪審長　年齢四十歳前後、全身悉く腫物を生じ、皮膚の色は濃い藍色になつて紫色の斑まだらが出てゐる。髪の毛は栗毛で、さはるとすぐ脱け落ちる。眼球は飛び出だしてゐて、角膜は黒ずんで

居り、鼻、耳、口から薄い鼠色のとろ／＼した液が滲み出てゐる。

フリユドフ（長椅子から立ち上り）陪審長、私は今日或る重大な理由で、あの被告人の身の上に関し非常な感動を受け、それがため陪審の席にも居られない程精神が興奮して、皆さんの御厄介になつたのでありますが、マスロワが最後に泣き叫んで言つた一言は、神に誓つて偽りではありません。此の事を眞に斷言し得るものは恐らく私一人であらうと信じますが、其の理由を、只今この席で述べるだけの決心がまだ私につきません、兎に角マスロワは竊盗を働いたり、人を殺したりする女でないことは、先程のお説の通りです。現に犯人はもう其罪を白状して死んだではありませんか？ それ程の大罪を犯したものが、裁判廷に立つて、マスロワのやうな態度でゐられるものでは決してありません。千百の證人や證據物件よりも、このたゞ一つの心の證が大事であります。私はここで天地神明に誓つて、マスロワの辯明に偽りの無いことを繰返して置きます。

陪審長 併しマスロワがコニヤック酒に亞砒酸を混じて其商人に飲ませたといふことを白自して居ります。

大佐 そして亞砒酸は毒藥ですからな。それについて自分の親戚に関する一つの例がありますから参考のためにお話しませう……

教師 いや例には及びませんから、簡単に願ひます。亞砒酸の毒藥たることは吾吾もまた認

めて居りますが、マスロワは其商人を少し眠らせる爲だといつて、老婆から渡されたのを、信じて飲ませたのです。ですから軽々しくさういふ事を信じた過失の罪はあるかも知れませんが、殺意は無かつたものと認めざるを得ません。

大佐　　そこがさ、分からない所だよ君。知りませんでした、殺すつもりはありませんでした、と犯人が言へば君はすぐそれを信ずるのかね？　そんな言ひぬけは犯罪人のきまりぢやないか。

ネフリユドフ　成ほどそれは言ひぬけかも知れませんが、がまた眞實かも知れまん。どちらとも分からない時には、たゞ其の當人について、さういふ事をするものであるか無いかを吾々が直覺で見とほす他はありません、其の心の證が何よりも貴いのです。證據などといふものは、たゞ物の外部だけしか照す力はありません。

大佐　　だから吾々は吾々の心の證で、有罪だと見とほしたのではありませんか！　吾々の方がよつぽど筋道が立つて居る。

ネフリユドフ　それを見とほすには、何よりも其の當人を知つてゐなくちやなりません。マスロワの生ひ立ちから經歷、彼れが今日のやうな悲惨な境遇に陥つたまでの事情を、それも心の底の祕密にまで立ち入つて知つてゐる者でなくては正しい直覺は出来ません。

大佐　　ふん、ではあなたは何か被告人に關する、祕密を御存じですか？　これは聞きものだ。

(立ちかゝる、皆々その方へ向く)

フリユドフ …… (眼をつぶつてゐる)

陪審長 何か特別の祕密を御存じですなら、それを此の席で打ち明けて頂きたいものです。それが被告人のためにも何より利益な事と信じます。こゝでお打ち明けになることが出来ないやうな祕密だと、却つて公爵の心證に或る私情がまじつてゐるのぢやないかといふ疑ひを起こさせます。公爵の公平を疑ふ材料になるばかりです。さういふ事情なら却つて知らない方が公平な判定が下されませう。

ネフリユドフ はゝ、公平！ 私は事情も知らないで冷やかな心から公平だと思つてゐるものと、事情を知つて同感するために不公平だと呼ばれてゐるものと、どちらが果たして眞の公平であるかを疑ふものです。

陪審長 さういふ御議論は法廷では許しません。

商人 公爵、兎に角その祕密な事情といふのを聞かせて下さい。吾輩は必ず何かそんな事があるのだと信じてゐましたぜ。不公平なんて、そんなべらぼうな事があるものですか。公平々つて、公平面を竝べてる連中なんざ、ありやみんな人情無しでさ。だからそんな手合の鼻を明かしてやるために、その祕密の事情てのを、ぶちまけてお了ひなさい。吾輩は一から十まであなたに同感でさ。

フリユドフ ……（尚答へず）

大佐 ぢやあ、別に祕密の關係も無いものと認める外はありませんね。へつ／＼その方が公

爵のためにもいゝやうだ。あんな女と祕密の關係なぞがあるとすると、ねえ君……

商人 あつたつて結構、憚りながらこゝにござらつしやる御連中でも、しかつめらしい顔は

してゐなざるが、どうだいあの女を別嬪でないとは言へますまい？ 別嬪だと思へば、も

う其の心には祕密の關係が出来たのぢやござせんか？

陪審長 要するにマスロワの一身に關しては常然、法廷に立會はれる方々は、先刻檢事が述べ

られただけの事情を御承知の事と見るほかはありません。すなはち此女は立派な教育を受

けて、フランス語までも解し得るに拘らず、私生兒といふ遺傳で、罪惡の血を生れながら

持つてゐたのです。身分ある家に引き取られながら、正當な生活を立てることが出来ない

で、其恩に背いて自墮落の行ひをなし、遂に自分から妓樓に身を沈めたのです。そしてお

客の商人をたらしめて其の所持金と指輪とを巻き上げんがため、鍵を預つて客のホテルに行

き、ちやうど犯罪を行はんとする所をホテルの傭人二人に見つけられ、遂に三人共謀して

其金を盗み、尚其罪蹟を隠す目的で客を連れ歸つて毒殺したのであります。どうか是れだ

けの事實に基いて御意見をお述べ下さい。

大佐 それから檢事はうまい論告をしましたね。斯ういふのが即ちデカダンの標本で、教育

ある墮落分子として最も多く社會に害毒を流すものであるから、社會は少しも之れを寛假すべき理由を認めないと、さういふ論告でしたね。

ネフリユドフ 此の女がそれほど惡むべき墮落者であるなら、其の罪は他人にあるのです。當人は却て純潔で正直であつたが爲に墮落させられたに過ぎません、それは到底あなた等に分らない事です。私はたゞあの女の顔にいかに哀れな不幸な運命の影があり、と跡を残してゐるかを見て貰ひたいと思ふばかりです。

教師 ですから、あなたにしか分つてゐない其の哀れな事情をお話しなすつたら如何です。

ネフリユドフ …… (尚答へず)

商人 (側へ行つて) さうなさい。それが一番近道でさあ。え、公爵？

ネフリユドフ (立つて商人の肩に手をかけ) 許して下さい。今はどうも話せません。それといふのも私の卑怯からです。許して下さい、許して下さい。私はたゞ……私はたゞ……私の義務としてこれだけの事を言はなくちやゐられないのです、許して下さい。(椅子の上に倒れかゝる)

陪審長 さあ諸君、議論も盡きたやうですから、マスロワは謀殺犯として有罪なるか無罪なるか、情狀酌量の餘地があるか無いか、起立によつて決を取りませう。(無罪有罪の起立を命じ、其數を數へる) その隅の所に着席してゐられる方は初めからどちらとも意志を表明な

さらないやうですが、無罪とお考へですか、有罪とお考へですか、どちらにでもお立ち下さい。

陪審の老人職工組合長 人間が人間を捌く権利はありません。

陪審長 陪審官として法廷にお出での上はさうはまりません。

組合長 世の中に誰れ一人罪の無いものがありますか？ 私等は神さまぢやない。

陪審長 ではマスロワは有罪ですか？

組合長 ですからすべての罪は赦されなくちやなりません。

陪審長 ではマスロワは無罪ですか？

組合長 無罪です。

陪審長 おや／＼。それでは採決の結果、二人の多数を以て殺人犯マスロワは有罪と決定しました。

ネフリユドフ (立ち上り) 有罪？

商人 かはいさうになあ？

ネフリユドフ それは實に残酷です！ 諸君、それは残酷です！ 私はそれを辯明する義務がある！

何もかも言つて了ひますから、どうか諸君お待ち下さい……

陪審官 公爵、もう間に合ひません。審議は終わったのですから、採決の結果を尊重なさるやう

に希望いたします。さあ、皆さん。

(陪審長が先に立ち正面の戸口から出て行く。)

ネフリユドフ (一人あとに残つて小使を呼び) 陪審長の所へ行つて、オフリユドフは病氣で列席せられませんかと言つて来て呉れ。それからあの辯護士のファナーリンさんが控室に見えてゐるやうだから、此名刺を渡してちよつとお暇ならこゝ迄来て下さいと言つて呉れ。それから、今の事件の宣告が済んだら、其の結果を聞いて来て呉れ。

(小使出て行く、ネフリユドフは心の苦しみに堪へぬ様子で室内をあるいてゐたが、テーブルの上にあつた法律全書を取つて、熱心に繰りはじめた。そこへファナーリンといふ名の賣れた辯護士が這入つて来る)

ファナーリン やあ、ネフリユドフ公爵、今日は御苦勞さま、いかゞですか、裁判は進行してゐますか？

ネフリユドフ 今ちやうど宣告がある所です。

ファナーリン あなたは何うしてこゝにおいでずすか！ 今日の陪審には列席れっせきなさらないのですか？ ひどくお顔色が悪いやうですね。どうかなさいましたか？

ネフリユドフ いや實は君に打ち明けて御相談したい事ことがあるのです。私は此の事件の陪審官たる資格を斷ことわつて被告マスロワのため控訴をし、それでいけなければ上告でも上訴でもして、是非ぜひともあの女の冤罪をそゝいでやりたいと決心しました。

ファナーリン 大たいへん御執心ですね。併しかしまだ裁判はきまりますまい？ 有罪と定きまつたのですか？

ネフリユドフ 陪審の方で謀殺犯として有罪いっざいに決めて了つたのです。けれどもそれが無實であることは私がよく知つてゐるから、是非救つてやるのが私の義務おむだと思ふのです。それで手續の御面倒を一つ願ひしたいと思おもひましてね。

ファナーリン なる程ほど、それは、ほかでもないあなたの事ですから、出来るだけの御盡力はいたしませうが。併し妙ですね。一囚徒のためにそれほどまで熱心におなりなさるといふのは、一體のマスロワといふ女はもとからお知合しりあひですか？

ネフリユドフ 知合ひです、或特別な關係を持つた女をんなです。

ファナーリン ふうむ！ あなたがねえ！ いや、併しそんな事は世間にもいくらかもある事ことですね。

ネフリユドフ　まあ其の先を聞いて呉れたまへ。關係と言つてもさう簡単なのぢやないのだ。今からちやうど十年前、田舎の別荘であの女が小間使をしてゐたころ、私が行き合つて軍隊生活の向う見ずからつい一夜つきりに弄んで了つたのだ。

ファナーリン　ふむ／＼。

ネフリユドフ　それが元で、女の妊娠となり、流浪となりして、とう／＼今のやうな賣笑婦とまで墮落して了つたのです。

ファナーリン　さう聞けばかはいさうでもあるが、併しあなたに取つちや、そんな事は何でもありますまい。若いときには誰れでもやることです。あなた一人に限つた事ぢやない。それに、今日の墮落はあながち其の最初の誘惑のためだとは言へません。間接の遠因になつてゐるかも知れないが、直接の責任はあなたにある譯はありませんね。

ネフリユドフ　世間の人はさう言ふさ、私もさう言つて今まで自分の心を押しつぶしてゐた。併し今日私の良心は目をさまして來たのです。第一の罪惡が無ければ決して第二の罪惡は生まれません。いくら遠い昔の罪惡でも、責任は其の第一歩にあるといふことをつく／＼感じました。罪は罪を生んで段々大きくなつて行く。私のあの過ちがとう／＼斯んな恐ろしい結果になつたかと思ふと、私はもう此の裁判に立ち會ふ勇氣が無くなりました。

ファナーリン　で、其の女が冤罪だといふ理由はどこにあるのですか？

ネフリユドフ それは第一が私の心證です。私は一目あれを認めると同時に、すぐ其の顔にそれが讀めたのです。さう思つて見て行くと、此事件のすべての證據はみんな不たしかなものばかりで、結局は人々の推定にすぎないと知れて來ました。斯ういふ境遇に陥いるくらの女は、罪を犯すのが當然だといふ假定を腹の中にたて、それから割出して行く判決に過ぎないのだ。それに比べれば私は遙によくあの女の境遇の祕密を知つてゐる、その私の推測が誰れの推測よりもたしかでなくてはならない。ですから、君、此の裁判を無効にする正式の手續を考へて下さい。費用などは幾らかゝつても構はない。

ファナーリン 承知しました。併し、どうしてそれが其の女だと分かりましたか？ 女が自身で法廷にそんな身の上ばなしをしたのですか？

ネフリユドフ 初めは私にも分からなかつたが、ふと呼び出された女の顔を見ると變つた中に不思議と昔のカチューシャといふ小間便に似た所があつて、それが私の眼さきにちらついてならない。何だか不安でたまらないから、見まいととしてゐても、やつぱり目について離れない。そんな事のあらう筈はないと打ち消して見ても、心の底からとカチューシャの記憶が出て來て、だん／＼はつきりとマスロワの顔に其の面影を認められるやうになつたのです。考へて見ると、をかした話だが、昨夜不思議に十年前の事を夢に見ました。今まで忘れよう／＼とつとめてゐた結果、まるで思ひ出しもしなかつた事を、どうしたは

ずみかふつと夢に見たのが、今日の記憶を助けたに違ひありません。初めマスロワと言つてゐるあひだはまだ半信半疑でゐたが、カチューシャといふ名を言つたので愈それに違ひな
いと分かつたのです。そして向うも何度か私の顔を見たが、向うには私といふことは到底
分からなかつたやうです、起訴状の朗讀や、検事の論告のたびに、顔を赤くして自分の罪
状に驚いてゐる様子や、最後にただそんな悪い事をした覺はないといった限り泣きくづれ
たさまは、いぢらしくて見てゐられなかつた。そのため私はとう／＼卒倒しかけたのです。
あゝ、あの最後の言葉を思ひ出すと、今でも體がふるへて來る。

ファナーリン 分かりました。あなたは大分感情が興奮してゐるやうだから、早くお歸りに
なつた方がいゝでせう。

(小使入り來たる)

小使 たゞ今宣告がすみしました。マスロワは徒刑囚としてシベリヤへ移されることになり
ました。

ネフリユドフ えゝ、シベリヤ？

(立ち上つたま茫然としてゐる。小使去る)

ファナーリン 徒刑囚、シベリヤ。ようございます。早速一件書類を調べて控訴の手續をしてあげませうから明日にもちよつと私の事務所へお出でを願ひます、其のとき萬事御相談をしませう。今日は早くお歸りなさるがいゝと思ひます。

ネフリドユフ ありがたう。それで何分とも願ひます。さやうなら。(ファナーリン下手口から去る。ネフリドユフしばらく立ちゐて)カチューシャがシベリヤへ。……それでいよ
く 私のする事も分かつて來た。私もシベリヤまで行かう。シベリヤはおるか、世界の果てまでもついて行つて、あれの體と靈魂とを救つてやらなくちやならない、さうだ、私にはもう財産も地位も用はない、身の累ひになるものは一切棄て、了つて、明日からは體一つになつて過去の罪を贖はなくちやならない。それでこそ、久しくなえてゐた良心に申譯が立つ。ああさう思ふと何だか急に身が軽くなつて、清々するやうな氣がする。カチューシャ、カチューシャ、決してお前一人をシベリヤへはやらないから堪忍して呉れよ。

(小使下手口から入り來たる)

小使

御婦人のかたが、馬車でお迎ひに見えました。

ネフリユドフ (ぎよつとして) 今日(けふ)は氣分(きぶん)が悪いから失禮(しつれい)しますと言(い)つて呉(ま)れ。

(小使(こし)が出て行く(い)くと入れち(い)がひにミシー盛装(せいさう)して入り來(き)たる)

ミシー

何(なに)うかなすつたの? 手紙(てがみ)であんなに約束(やくそく)して置(お)いたのに、今日(けふ)は失禮(しつれい)するなんて、ひどいわ。ほんとに御氣分(ごきぶん)が悪いのですか?

ネフリユドフ (慰(なぐさ)めるやうにミシーの手(て)を取(と)つて) ミシーさん堪忍(こら)して下(くだ)さい、今日(けふ)の裁判(さいばん)が私の氣(き)を顛倒(てんたう)させて了(しま)つたのです。今日(けふ)は氣分(きぶん)がわるくて、とても御一緒(ごいっしょ)に行く(い)くことは出來(き)ません。(ぢつとミシーの様子(ようす)を見(み)てゐ(ゐ)たが突(つ)き放(はな)すやうにして) 或(ま)はこれ(こ)れきり、永久(とこ)御一緒(ごいっしょ)に行く(い)くことは出來(き)ないかも知(し)れません。

ミシー (泣(な)き聲(こゑ)になつて) あら、私(わたし)どうしようか知(し)ら。なぜだ(なに)しぬけにそんな事(こと)をおつやる

の? 何(なに)うかなすつたの? 今日(けふ)の裁判(さいばん)でどんな事(こと)があつたのですか、聞(き)かして頂戴(ごんがい)。

ネフリユドフ まあ、ちよつとこゝへおかけなさい。今日(けふ)は實(じつ)に重大(じゅうたい)な事(こと)があつたのです。お宅(たく)でのゆつくり話(わ)せばいゝのだがそれももう無駄(むだ)な事(こと)のやうですから、こゝでかいつまんで言(い)つて置(お)きます。よく聞(き)いて置(お)いて下(くだ)さい。

ミシー (段々眞面目になつて) 何でせう?

ネフリユドフ 私はね、今までまだあなたと公然結婚の約束をした事はないが、その前に斯う言

つたらあなたは どうします? —— 私は決して清浄無垢の人間ぢやないと、さう言つたら?

ミシー 別に何とも思やしませんわ。何をおつしやるのだらうぐらゐにしか思やしません

ネフリユドフ 私の過去には或る大きな罪惡があります。それを今いよ $\left\langle \right\rangle$ 贖はなくちやなら

ないやうになつたのです。それを贖はない内は私は決して無垢の人間ぢやありません。

ミシー ぢやそれを贖つたらいゝぢやありませんか? 私どんな事だつて、あなたの爲なら

お手傳ひしますわ。

ネフリユドフ それを贖ふためには、あなたと此の上の御交際は出来ないのです。あなたのお家

とも是れきりになる他はありません。私は明日から、地位も財産もない、貧乏な平民にな

つて了ひます。

ミシー まあ、そんな大變な事になるのですか? 一體その罪惡といふのは何でせう? 聞

かせて下さいな?

ネフリユドフ それは私が過去の男の生涯です。それだけ言つて置けばいゝでせう。

ミシー 男の生涯!

ネフリユドフ あなたはまだ年が少ないから、此のうへ打ち明けて聞かすことは出来ませんが、

私は其罪を贖ふために、囚徒しゅうとの女と結婚するかも知れません。

ミシー　まあ、どうかしていらつしやるのね？

ネフリユドフ　どうもしちやみません、本當の事を言つてゐるのです！

ミシー　ぢや、まあ！　あなたは私をだましていらつしやつたのですね？

ネフリユドフ　だました譯ぢや決してありませんが今までは大して悪いとも思はなかつた事ことが、

今日の裁判ではじめて恐ろしい事だと分かつたのです。ですから此のうへあなたと御一緒わすにゐては、それこそあなたをだます事になります。どうか今までの事はあれきりにして忘れて下さい。お頼みです。

ミシー　あゝ、あなたは！　（蒼白くたになつて）もう澤山たくさんです、もう澤山です！　分わかりまし

た。どうか御自由になすつて下さい。私もう歸りますわ。お母さまが待まつていらつしやる筈はずだから……さやうなら。

（ミシー出て行く。ネフリユドフ見送つて立つてゐる）

…幕…

第三幕

モスクワ監獄の女囚室の一、正面中央に大格子窓、其奥は薄暗い室と假定する、格子窓の上手に大扉、其横手に格子窓、下手横に鐵の小さい扉。室内には隅に寄せてベンチや粗末な寢臺や木箱が置いてある。遅い午後女囚三四人マスロワを取巻いて騒いでゐる。

大ロシヤ (と綽名せられた女) (窓から外を見て) やい、そこにゐる爺い、てめえ、もう濟んだのかい？

老女囚 だまればたら！ 業つくばりめ。お祈りの邪魔になるぢやないか？

大ロシヤ 何だと？ 牢に這入りやがつて、お祈りも神さまもあるかい？ 大腸婆あめ。

老女囚 今に見てゐるよ、あたしが、何うするか。(神の像の前に膝をついて) お救ひのマリアさま、どうか私たちをお守り下さい。そしてあの大ロシヤめを足腰の立たない目に遇せてやつて下さい。

美人 (と綽名せられた女) ほんとに、もう澤山だよ。あの肺やみは奥でゴホゴホやつてゐるし、大ロシヤは悪たいのつきどほし、お婆さんはグシャ／＼お念佛ばかり言つてゐて、

うるさくてく／＼しやうがない。

大ロシヤ (尚窓の外へ) さうだよ爺、私窩子だよ、モスクワの私窩子だよ。若くて奇麗でさ：

…羨ましくはないかい？

美人 一體誰れと話してゐるんだ？ (覗いて見て) いやだ！ あの禿ちよろの、狎ころ親

爺とだよ！ 呆れつちまふよ。

看守 (下手口から入つて来る) くら靜にしないか？ 大ロシヤ、窓の外へ何を言つてる？

窓を離れなさい、窓を離れなさい。

大ロシヤ はいく、小言を喰ふのはいつも私ばかりよ。

看守 お前の聲が一番大きいからだ。

大ロシヤ あの^{ひやつびろばあ}大腸婆さんだつて、随分大きな聲をしますわ。

老女囚 餘計な事を喋るない。自分が叱られやがったものだから、小言の相棒をこしらへよ

うと思やがつて。看守さま、此の檻房で暴れるのはあいつ一人でございますよ。こつぴど

く喰はしてやつておくんないまし。

大ロシヤ 何だこの婆あめ。

看守 くらく。二人ともそのざまは何だ？ 靜にしないと、またひどいに目に逢ふぞ。

みんな仕事でもしてゐろ。

(マスロワは正面窓下のベンチに腰をかけ、手に顔を埋めたまゝ、初めから何も言はないでゐる。フォードシアが之も無言で其傍で編物をしてゐる。老女囚は床にすわつて縫物をしはじめ、大ロシヤ、美人等はそこらにぐつたり腰をかけてゐる。一人の無言の女は、始終室の端から端へ行つたり來たりしてゐたが、此時寢床の上に向うむきに寝て了ふ。舞臺しばらく森となる。看守出て行く)

フォードシア (マスロワに) お前さん、まだ泣いてゐるの? ねえ、私、これからお前さんの事を姉さんと言はせて頂戴な。お湯を貰つて來てあげませうか? 其の巻パンでも喰べたらどう? 随分お腹がすいたでせう?

美人 この人がシベリヤへ流されやうとは、全く思はなかつたよ。無罪放免で、お金でも貰つて歸つて來るだらうと思つてゐたのさ。

フォードシア 一たい何年くらゐ向うに居ればいゝのだらう?

大ロシヤ 二十年ていふぢやないか。

フォードシア 二十年? まあ! そのあひだには死んぢまうわねえ。

大ロシヤ 死ぬとも。シベリヤへ行きや、大ていの奴は二年か三年でくたばつて了ふさうだよ。

フョードシア (すゝり泣きながら) 私、死ぬまで姉さんの傍は離れないわ。

老女囚 それだから私が言はないことぢやない。いゝ辯護士を頼んで、うまく言ひぬけなくちや駄目だつて。

マスロワ (顔を上げて) あゝ、もう何も言つてお呉れでない。シベリヤだつて何だつて構ふものか。行けといふなら、何處へでも行くさ、シベリヤでもサガレンでも、私一人、此の世にゐるのがそんなに邪魔なら、いつでも來て殺すがいい、縛り首にでもするがいゝ。

老女囚 だつてお前、言ひぬけられるだけは言ひぬけなくちや嘘だよ。

マスロワ 言ひぬけるつて、私には、言ひぬけることも何もありません。私や、何もしやしないのだよ。ただ私がこんな商賣をしてるばかりに、みんなで、よつてたかつて私を罪人におとしちやつたのだよ。だから私もうあきらめちやつた。こんな體になつたのが私の不運だよ。

老女囚 世間の奴ら、ほんとに憎いつちやない。みんな大悪人の癖に大きな面をしてやがつて、こちと等のやうな弱いものが、何かするとすぐ罪人呼はりをしやあがる。こちと等の方がよつぽど善人だい。

大ロシヤ 全くさうだよ。

美人 正直なものが馬鹿を見るんだよ。

老女囚　あ、あ、お縫り申すのは神様ばかりだ。(また聖像の前に立つて) お救ひのマリヤさま、どうぞ私どもをお守り下さい。

大ロシヤ　およしよ、馬鹿らしい。

マスロワ　私たちの神さまは、もう疾づくに居なくなつたのだねえ！(次の臺詞のあひだ、マスロワはそつと奥の室へ這入つて行く)

老女囚　何がさ、お前、神さまがお出でなさらなきや、此世は全くの闇だ。せめて神さまお一人をたよりに、私たちが生きて行けるのぢやないか？　神さまのお心に背いちや、私たちだつても何も出来やしない。

大ロシヤ　もう何も出来ないぢやないか？　こんな所へ來ちやあ、生きてるも死んでるも同じことだ。神さまに守つてもらつてる奴が牢屋へ來るか。

老女囚　だから世間が悪いといふぢやないか？　手前だつて、神さまのお心に背いたゝめにこんな所へ來たとは思つてゐまい。

大ロシヤ　私は世の中に神さまも何も居ないと思つてゐるよ。甥が間違つて召集で徴兵に取られやうとした時、村中のものが集つて巡査に手向ひしたのを、現在伯母の私がどうして黙つて見てゐられるかい。私は飛び出して、甥を乗せた馬の鼻づらを押へて、巡査を刎ね飛ばしてやつた。それが悪いと言つてこんな牢屋へ入れやがつたのぢやないか、神さまがほ

んとうに居たら、こんな無法な眞似をさせて黙つて見てゐるだらうか？

老女囚

さう言いや、私だつて、二度目の亭主の奴やつが、爺の癖に私の連れ子の阿魔と巫山戯た

眞似をしやあがつて、あんまり情ないから、ぶつた切つてやつたのさ。どつちが善いか惡いかは神さまがみ見てゐて下さる。それから此の人だつて（美人の方を指して）こんなにお洒落はしてゐても、娑婆ぢや鐵道の線路番のおかみさんで、信號の旗を振ふるのを間違へた爲ために汽車が衝突したのだといふじやないか？ 誰が好き好んで汽車きしやを衝突させる奴があるものか？ ねえ、怪我だあね。それを後の見せしめだといつてこんな所へ抛はり込んで、抛り込まれたやつこそいゝ面の皮だ。お前さんが運わるく損な番に巡り合はせたのだよ。それからあの物を言はない女だつて、自分の子どもを河へ投げ込むにや、よくよく辛い譯があつたのだらうさ。それはみんな神さまが御承知だ。

（この時、ちよつと森となる、先ほど寢床の上に横になつた女の綴り泣きの聲が聞こえる。みなく其方を振り向く）

フョードシア あれはね、寝ねると昔の事を思ひ出だして、それが夢だか現だか、どうしても分からないのだつて。昔惚れてゐた錠前屋さんの事を想ひ出して泣なくのだつて、かはいさうねえ。

(マスロワ奥から酒氣を帯び、ヴオツカの瓶を持つて出て来る)

マスロワ さあ、みんな景氣づけに一杯はっやらないか？

(腰をかけ一口喇叭飲みにして、大ロシヤに渡す。老女囚は顔をしかめる。美人寄つて来て、大ロシヤの手からひつたくるやうにして飲のんで、マスロワに返す)

フョードシア (マスロワに) 姉さん、またそんなに飲んぢやいけないわ、もうおよしなさいよ。
マスロワ これが飲まずにゐられるかい、お前。飲むとこんなに、いきもち氣持になるぢやないか？
昔の事も今の事も、みんな忘わすれちやつて、たゞもういきもち氣持だが、今日は私、全く驚いぢやつたよ。私が罪人だなんて、ねえ、どうすれば、そんな事が言へるのだろう？ このかはいいカチューシヤが人を殺したなんて。ほんとに驚いて了ふわ！ その癖くせ、みんなで、私を見ちやニコニコして喜んでゐた癖くせに、裁判所でも、あの意地のわるい検事のほかは、みんな私に色目をつかつてゐたよ。

美人 男といふ奴やつは、みんなそんなものよ。女と見りやあ、砂糖に蠅のたかるやうに集まつて来るのよ。

マスロワ　　だけど、それが悪いのでもないし、誰が悪いのでもないよ。あたりまへの事なのよ。ねえ、私は斯う思ふのよ。一體世間の男は、どんなものでも、好い女を欲しがらないものはないし、好い女はさうして欲しがられるために出来たのだから、精々欲しがらずやうにするのが當りまへだわ、私も今まで随分と、いろんな男に出くわしたが、たゞの一人だつて私を欲しがらないものは無かつたよ。私にも、自分が好い女だか何うだか、そんな事は知らないけれど、みんなが欲しがるから好い女なのだらうと極めちやつたのよ。全く、出くわす男も、出くわす男も、みんな私一人を的に、いろんな知慧を絞つたり、金をつかつたり、喧嘩をしたりして来たのだもの。

大ロシヤ　　さうだらうとも、其の話を聞かしてお呉れよ。

マスロワ　　聞かさうかねえ。まづ一番にね、私にねらひをつけて来たのが、私の育てゝもらった別荘の若旦那でね、自分の高い人だつたのよ、それがお前とうとう私を手ごめにして、翌くる朝、百圓札一枚私の懐へ押し込んだきり行つちまつて二度とたよりもしなくなつたのよ。

老女囚　　百圓札を！

マスロワ　　あゝ、百圓札を。だけど其のころは私まだ金なんか欲しくなかつたものだから、其の金をみんなに呉れちやつてさうかうしてゐる内に私は妊娠したと分かつたのさ。それで

別荘にも居づらくなつて、或る役人の家へ奉公したのさ。するとお前まへ、その主人といふのが、五十面を下げて、うるさく私に付きまといつて来るぢやないか。あんまりうるさいものだから、馬鹿野郎とどなりつけてそこも飛び出しさ、其そのうち生み月になつたものだから、村で造り酒の抜け賣りをしてゐる産婆の家へころがり込んで、子どもだけはそこで生うみ落おとしたが、その子はすぐ孤兒院で死んで了つた。

美人

かはいさうにねえ。

マスロワ 其その次に奉公したのが山林の役人だったが、その主人は前の役人やくにんよりも上手だと見みえてね、とう／＼私をおびき出して、うまく手てに入れてやがった。けれどそれも長くは續つかないで、その家の細君と摺つみ合ひの大喧嘩をしてさ、給金を踏ふみ倒たふされて飛び出しちやつた。(酒を又一口飲んで次へ廻まはす)

大ロシヤ そんな分わからない奴は、張り倒してやればいゝのに。

マスロワ それから何處どこだつけ？ さう／＼伯母おばが洗濯屋をしてゐるから、その洗濯女にならうかと思おもつただけだね、それもあんまりみじめだと思つて、桂庵の手から或ある女主の家うちへ奉公ほうこうしたのさ。すると今度はその總領息子で中學の五年生ねんせいといふのが、もう口髭くひげなんかはやしてゐてね、學校そつちのけに私の跡あとばかり追おひ廻ましてゐるものだから、私わたしがそゝのかしてでもゐるやうに母親ははから睨にらまれて、そこも長續ながつづきはしなかつたのさ。

美人

油斷ゆだんもすきもあつたものぢやないね。

マスロワ

それから二度目に桂庵へ行くと、又傳手で或る旦那といふのに引き合はされたが、それが髪も髯も胡麻鹽になつた脊の高い男でね、無氣味な眼つきをしてニヤ／＼笑ひながら私にふざけかかつて来たのよ、するとおかみが其の男を次の間へ呼び出して「どうです旦那、田舎から出たての手いらずの處女ですよ」って頻りと取り持つてゐたが、とう／＼二十五圓で世話になることに話がついた、のでね、私は貰つた手附金で借りを返したり、着物や帽子を買つたりした。

美人

つまり旦那取りだね！

マスロワ

あゝ。だけど私は、よく／＼男運の悪い女だと見えてね、その旦那の世話で引き越した下宿の隣り部屋に面白い氣象のお店者がゐて、いつか其の男と出来てしまつたのさ。さうなると私の氣象で、其のまゝぐゞ／＼にしてゐるのがいやで、さつぱりと旦那に打ち明けて別かれて貰つて其の男と一緒に世帯を持つたよ。所がそのお店者め、いゝ頃合のところ、商用だとか何とか言つて出て行つたきり歸つて來ないで私を置き去りにして了やがつた。

大ロシヤ

憎にくいつたらありやしない。そんな奴こそ、目つけて引つぱたいてやるといゝのに。

マスロワ

さうなつて行くのが、つまり私の運だつたのだねえ。そして私はその頃からやけ酒

を飲むことをおぼえて、一日酒浸りになつてゐることもあるし、しらふの時は、つく／＼自分で自分に愛想のつきることもある。もう／＼私の體は何うなつてもいゝから、したい三昧の事をして過すごせといふ氣になつたよ。そして或る女術の手で、私わたしはどう／＼今までゐた家へ身を沈めて了つた。それがめぐりめぐつて、こんな落ちになつちやつたのさ。ねえ、人の行末ほど分わからないものはないわねえ！（また酒をあふる）は、は、は。今度はシベリヤかサガレンへでも行つて、そこの牢番のおかみさんにでもなるかねえ？

美人　でも、其程の男の中で、お前まへさんの方ほうから打ち込んだ男があつたかえ？

マスロワ　それは一人や二人はあつたさ。私を置き去りにした男おとこだつて、憎にくくはなかつたよ。だけどやつぱり一番長く残つて、今でも時々思ひ出だすのは、初恋だね。その公爵の若さまだけは、其の頃のうぶな心でしみ／＼かはいゝと思つたつけが、今いまから思や薄情者だつたのねえ。

美人　お店者でも公爵でも、揃そろひも揃そろつて薄情者だつたのだね！

マスロワ　あゝ、だからもう／＼男といふものはたよりにならないものと極まめちやつたのさ。（また酒を飲む）あゝあ。随分長い身の上話をしちやつたわね。

フォードシア　さお姉さん。水みづをあげませう。もう其のお酒はおよしなさいよ。私わたしが斯うしてしまつて置いてよ（ベンチの下から薬罐を出し水みづをコップについですすめ、瓶をそこへ隠す）

マスロワ あゝ、いゝとも。煙草が一服呑みたいねえ！ 誰れも持つてゐないの！ おや／＼、今日は不景氣だね。

フォードシア 私、あとであの押丁さんにねだつて置いてあげるは。

マスロワ ありがたうよ。今度はお前さん一つ身の上ばなしをおしよ。そんな優しいいゝ人が、どうして自分の御亭主を殺さうなんて、大それた事を思ひたつたの！

フォードシア それはね……私ほんとに不仕合だつたのよ。私がお嫁に行つた時は、やつとまだ十六だつたの。でね、見たことも無い人の所へ無理やりお嫁にやられて、私、たゞ恐いばかりで、ほかになんにもありやしないのだから、泣いて泣いて泣き通して、どうしても其の人と一緒になつてやらなかつたの、私、今考へると、その時の心持が自分でも分らないわ。きつと魔がさしたとでもいふのでせうね、とう／＼其の人を殺しても自由になりたいと思つて、そんな眞似をしちやつたのですよ、それなのに、不思議なこともあるものだわね。八月ばかり保釋になつてゐる間に、すっかり其の人が好きになつたの。馭者をしてゐるんだけれど、それや氣立の優しい人でね、今や兩方から離れられないやうになつてるのよ。それでどうか此の事を願ひ下けにしたいと思つただけれど、もう間にあはないのですつて。そして五年の宣告を受けて、此のさきどうして生きてゐられるでせう。ねえ、姉さん、

察して頂戴。

(看守入り來たる)

看守　マスロワ。これをお前の主人だといふ女の人が差し入れて行つたよ。金かねが二圓五十

錢と巻煙草が一函。

マスロワ　お金と巻煙草！　そらね、言いはないことぢやない。今日は何か福おもがあると思つたのだよ。看守さん、どうも有りがたうございました。

看守　禮はその人ひとに言へ。

マスロワ　それやさうですけどさ。その人はきつと私をかゝへてゐた家のおかみさんですよ。

看守さん、どうぞよろしく言つて下さいな(看守の出て行く後から追うて行つて、出口の所で銀貨を一つ握らす)さあこれで、呑みたいくと思つた煙草にもありつけたと。マツチはどこにしまつてあるの？　(一本つけて、うまさうに貪り吸ふ)あゝあ、酒と煙草の中に私の命はあるんだね！

(煙の香臭いで他の女等、羨ましさうに寄つて來る)

老女囚 (さつきから縫つてゐた針仕事を下に置いて) 私にも一本相伴させてお呉れな。お

前さん、辯護士に控訴の事を頼んだのかい？

大ロシヤ 私にも一本お呉れな。控訴する時には、お前さんの名を書かなくちやならないのだが、そんな手続はしなかつたらうね。私が知り合ひの上手な辯護士を世話してあげやうか知ら。

老女囚 そんな事は、お前さんよりも、私の方が明るいよ。

大ロシヤ 私、なにもお前さんに言つてるのぢやないよ。餘計な事をお言ひでないよ。

老女囚 へ、煙草が呑みたいものだから、急にお世辭をつかひやがつて。

大ロシヤ どつちがだい？ この百ぴろ婆あめ。

老女囚 業つくばり、今に見てゐろ、晩になるとたゞぢや置かないから。

美人 まあ静におしよ。

大ロシヤ へん、誰れが百ぴろ婆あなんか恐がるものかい。

(看守再び這入つて来る)

看守 くらく。また騒ぎ出したか？ 静にしろ、静にしろ。(鐘が鳴る) そら、もう晩

のお祈りの時刻だ。みんな列をつくつて行くのだぞ。列をつくれ、列をつくれ。

(女囚一同列を造り看守の跡について上手口から出て行く。舞臺ちよつと空虚となる。やがて下手口から看守に伴はれてネフリユドフ、ファナーリン入り來たる)

看守 囚人は今禮拜堂の方へ行つてゐますから、マスロワだけ先にこゝへ連れて來ます。

御面會の時間はかつきり十五分ですよ。

ファナーリン 典獄に特別談判をして來たのですから、十五分と限つた以上、それより延びてはよくありませんし、他の囚徒の歸つて來ない前にお濟みにならないと、此の室で會つてゐるのが犯則になります。だから御用談はなるたけ早くお進めになる方がいゝでせう。

ネフリユドフ ありがたう、ありがたう。ではしばらく、どうかあなた方はあちらでお待ち下さい。

(ファナーリン、看守、出て行く。ネフリユドフはそこに立つたまゝ、室内を見廻してゐると、下手の戸があいてマスロワ小きぎみの足つきで這入つて來る。ネフリユドフの顔を訝り見ながら、ちよつと髪を撫で、數歩、前に立留まつて、其りうとし

た身なりを見、媚びるやうな微笑を浮べて)

マスロワ 今日。あなたですか、私に面會したいとおつしやるのは？

ネフリユドフ (胸を躍らせ聲をしやがらせながら) 私だが、お前、もう忘れたらうね？

マスロワ (まぶしさうにして媚びる態度で) さうね、どなたでしたっけか、今ちよつと思ひ出

せませんわ。だけどきつと、私かはいがつて下すつた方でせう？

ネフリユドフ (帽子をぬいで一二歩近より) 私だよ、よく見て思ひ出して下さい。さあ——分
かつたか？

マスロワ (しつかりとは見ないで、そはくとして) え、おぼえてゐます。おぼえてゐま
す。お名前はあの……さうでしたっけね？

ネフリユドフ ネフリユドフ。

マスロワ (耳にとめないで) さうくよくあるお名前でしたっけね。で、どうして私がか
りましたか？

ネフリユドフ 昨日裁判所で、陪審官になつてお前の裁判に立ち會つたが、お前は氣がつか
なかつたらうね？

マスロワ まあ、さうでしたか！ ちつとも氣がつかせませんでした。ぢやあなたも御一緒に私

を裁判なすつたのね？ 私シベリヤへやられるのですつてね？（言つて唇をふるはせ）あんまりひどいわ、無實ですわ、まちがひですわ。私決してそんな悪い事なんかしやしません。……でもあなた、どうして逢ひに来て下さつたのですか？ 裁判がどうかなるのですか？

ネフリユドフ その事で來たのだが、私はどんな事をして、お前のその無實の罪を救つてあげようと決心したのだよ。

マスロワ ほんとうに御親切ね。（つゝ、まじやかに男に近づき、娘らしい調子で）あなたね、若し實際私を助けて下さるおつもりなら、少しお願ひがあるのよ（賤しげに諂ひ笑ひをする）

ネフリユドフ あゝ、何でもするから、言つて下さい。

マスロワ かなへて下さつて？ どうもありがたう。私ね、何よりも先に控訴しなくちやいけないのださうですが、いゝ辯護士を頼むとお金が大へんかゝるんですつてね？

ネフリユドフ その事なら、もう私が手続きをして來たから安心して下さい。今日來たのもお前にそれを承知して置いて貰はうと思つたからさ。で、もし控訴でいけなければ上訴でも何でもして、是非ともお前を救ひ出すつもりである。金のことなんか少しも心配するに及ばない。

マスロワ （わざと嬉しげに）まあ、うれしいこと！ それで安心しましたわ。それから今一つ

のお願いなのはね、……（躊躇して）私少し買ひ物がしたいのですけれど、……あんまり澤山頂いても無駄につかつたり、みんなに借りられたりするばかりですから……ほんの少しばかり……お錢をね……十圓でいゝのですよ、たゞそれだけでいゝの。

ネフリユドフ お錢を？……（絶望の様子で）あゝ、あゝ、いゝとも、上げるよ。

マスロワ ちよつとお待ちなさい。看守があつちへ向くまで（外の方にゐる看守の様子をふりかへり見て、後向きにさもしげな手つきで金を取らうとする。看守の姿見えなくなる）さ、さ、早く下さいな。どうも、ありがたう（急いで其金を靴下の中へ隠す）

ネフリユドフ （ぢつと見てゐて絶望のためいきをする）あゝ、お前、そんなにまでなつたのか？ マスロワ え？ 何ですつて？（見上げて媚び笑ひをし）そりや、もう、どうせ牢屋へまで來

たんですもの、貧乏もしますわ。このつきいらつしやる時に、若しまた願へたらまたお錢を少し貸して下さいな……、それから巻煙草を少し持つて來て下さるといゝのだけれど……あ、さうく、私、今一つお願いがありますわ。（また看守の姿を見て）あなた、あいつに二圓ばかり掴ませておやんなさいよ。うるさくていけないから。

ネフリユドフ よしく。

（看守の方へ行く。マスロワは其の間にベンチの下の酒の瓶を取り出し其の口から

酒をあふる。ネフリユドフの入り来るのを見てあわて、瓶を後手に隠し壁の方へ寄る）

マスロワ　今、水とコーヒーと交ぜたのを飲んだところなの。私、一日中何も飲まなかつたも

のだから、喉が渴いて、喉が渴いて、こゝが焼けつきさう（苦しげに胸をたたく）

ネフリユドフ　お前今、何かまだ私に頼みがあると言つたね？

マスロワ　さうく、さうでしたつけ、……何だつたらう？　あ、さうく、私の妹分わたしでね、

フョードシアといふ女囚があるのですよ。それやかはいゝ女でね、何も知らない内にお嫁にやられたといふので御亭主を毒殺しようとしたのですつて、それが保釋うちされてる間にすつかり仲なほりが出来て、今や羨ましい程な夫婦仲なのだのに、どうしても罪に落ちなくちやならないのださうです。あの子も、ついでに救つてやつて下さらない？

ネフリユドフ　ふむ……それは調べて見なくちや分からないが、辨護士に頼んで見ようよ。私はね、お前を一日も早くこんな所から救ひ出して、せめてもつと静かな病院か何かの方へでも廻して置きたいと思ふのだが、何なら其の女も一緒にその方へ行けるやうに、運動しよう。

マスロワ　さうして下さるとありがたいわね。

ネフリユドフ　もつと周囲の静な綺麗な所へでも移つたら、お前の眠つてゐる靈も眼をさまして來るだらう。

マスロワ　お説教のやうだわね。

ネフリユドフ　あゝ、カチューシャ、お前はまだ本たうの事を想ひ出して呉れないのだね？　ネフリユドフといふ名が分らないのかい？

マスロワ　何だか變ですわね、ネフリユドフだのカチューシャだのつて、あなたどうしてそんな名前を御存じ？

ネフリユドフ　（十年前の寫眞を取り出して女の手に渡し）どうか此の寫眞を見て思ひ出して呉れ。

マスロワ　（寫眞を手に取つて）あなたのですか？　女のかたもいらつしやるのね？　綺麗ですこと！（尚ぢつと見てゐる）

ネフリユドフ　よく見て下さい。十年前お前がまだ私たちの別莊にゐた頃の寫眞だ。あの、復活祭の晩の事をお前はもう忘れたのか？

マスロワ　（男の顔に目を向け、ぢつと見て身ぶるひし寫眞を床の上に投げつけ飛び上がるやうにし覺えず拳を固め）この惡魔め！

ネフリユドフ　（マスロワの撲らんとするのをぢつと受けて）カチューシャ、私はお前にあやま

りに来たのだよ。

マスロワ　悪魔！　悪魔！　薄情者！　あなたのやうな薄情者は、私がこんなざまになったの

を見物する氣でも来たのでせう？　よくも私の前で、あなたの名前が名乗れたものだ。

ネフリユドフ　カチューシヤ、みんな私の罪なのだからどうか、許して呉れ。

マスロワ　それだけの事なら、何もこゝまで追つかけて来る必要は無いぢやありませんか？

こんなになつてる私を、なぶつてやらうと思つて来たのですか？　あなたにだけは私、こ

んな境遇で會ひたか無かつたのですよ。それをわざ／＼探し出して、こんな侮しい恥しい

思ひをさせられて……あゝ、私、あひたくない、あひたくない！（両手に顔を埋めて泣く）

ネフリユドフ　私は實に申譯の無い事をした。十年前のお前に對する不始末が昨日の裁判を見て

空恐ろしくなつて来た。私はどうかして其の罪が贖ひたいと思ふのだが、カチューシヤど

うか私を許して呉れ。

マスロワ　（顔を上げ涙を振り拂つて）御免なさいよ、私が悪うございました。私もう疾くの

昔あきめた筈でしたつけ。ついあなたのお顔を見たものだから、あんなに怒つちやつて。

でも、みんな運ですわ、そんなに心配して下さらなくてもようございます。お互にあの頃

の事は、もう／＼忘れましたよ。

ネフリユドフ　いや、忘れてゐるのが私の過ちだったのだ。……（苦しみな沈黙の後）子どもがゐ

マスロワ　冗談はおよしなさいよ。もう時間が來ますよ。

ネフリユドフ　とても／＼そんな事で済むものぢやない。やつぱり、私のこの體で救はなくちやならないのだ。行くところまで行かなくちやならないのだ。ねえ、カチューシヤ、私はお前の體の清まりきるまで、何處までもついて行つて、どんな事でもするから、それで私を許して呉れるだらうね？

マスロワ　なんて諄いのでせう？　私、あなたを許すことなんかありやしませんわ、昔の事なんか言ひつこなしですよ。さあ、もうお歸りになるのでせう？　（軽く手を握つて）辯護士のお金の事は依頼み申しましたよ。

ネフリユドフ　その事はたしかに引受けたから、書類が出來次第、お前の名を書いて貰ひに來ます。けれどもお前は、たゞそれきりで別れるつもりかい？　他に言ふことはないのかい？　許すとも許さないとも、憎いとも懐かしいとも言つて呉れないぢやないか？

マスロワ　そんな野暮つたい話はもうお止しなさいよ。

ネフリユドフ　カチューシヤ、どうか是丈は眞面目に聞いて置いて置いて呉れ、私は今日限り地位も財産も棄てゝ了つて、お前を救ふ爲に、お前と結婚しようと思ふのさ。

マスロワ　（ぢつと聞いてゐて、屹となり）何ですつて？

ネフリユドフ　（決心の調子で）お前を救ふためには、お前と結婚でもする。

マスロワ 結婚けっこんもするのですつて？

ネフリユドフ あゝ、それが私の、神かみに對する義務おもだと思ふ。

マスロワ (ぢつと見すゑて、唇を顫はせ抑へがたい悲憤と冷笑の調子で) 神に對する義務だつて！ はゝ、はゝ、神かみさまのお引合ひなんか、お止しなさいな。神かみさまを頼たのむのなら十年

前だつたのでせう？ (顔をネフリユドフの方へ突き出す。酒の息がする)

ネフリユドフ お前まへ、酔よつてるね？ まあ少し落ちついてお呉くれ。(肩に手をかける)

マスロワ (振りはなして) 私、落ちついてますよ。さう、酔よつてもゐますさ。けれど酔よつたつて、言ふ事は正氣よ。ね、あなたお聞きなさい。私は醜業婦なのですよ！ 人殺しの罪人なのですよ！ はゝ、私はさういふ身分のものですよ。そしてあなたは、公爵の御前でいらつしやる。それがまあ、私と夫婦にならうとおつしやるんだから、とぼけてるわねえ、随分とぼけてるわねえ。そんな馬鹿ばかな料見はお止遊ばせ、御身分にさはります。あなたの奥方には、何處かのお姫さまでもお迎へ遊ばせ。私ごようが御用なら、十圓札一枚で、いつでも御用を達たしますよ！ (酒瓶を片手に持ち片手を其の上に乗せて憤怒の形相でつつ立つ、調子は初めわざと冷嘲であつたのが、段々怒りに移る)

ネフリユドフ 靜にして呉れ、カチューシャ、私がどれ程良心に恥はぢてるるか、お前まへには分からないのだ、そんな恥かしい事を言つて……。

マスロワ 恥ぢだつて？ ヘッ！ どうせ私は醜業婦さ！ 十圓札で御用を達すに不思議はな

からう？ もつともお前さんはあの時百圓札を私の懐へねじ込んで逃げて出したつね。

ネフリユドフ カチューシヤ、カチューシヤ、みんな私が悪かつたのだ。だから正式に結婚して、
罪を贖はして呉れといふぢやないか？ お前は正氣を失つてゐる。

マスロワ まだふざけた事を言つてるのかい？ 私をだしに使つて自分の罪を贖ふんだつて！

へ！ いゝ料見だ！ 此のうへまだ私をなぶり物にしようといふんだね！ 私に恥をかゝ
せようと思つてやつて來たんだね？ ……さあ！ 私に指一本でもさして見ろ。お前さん
と結婚する位なら、首でも縊つて死んだ方がましだ！ 私、もう、その生つ白い脂ぎつた
顔を見るのも嫌だ。さあ、もう、いい加減に歸つて行かないか？ 出て行け！ 出て行け！

（地だんだを踏んで罵り、また酒をあふり瓶を傍に置く）

ネフリユドフ （涙ぐんで）ぢや今日は歸るが、どうぞあとで、も一度思ひ直して呉れ。お前に見
せようと思つて持つて來た寫眞だから、之れは預かつて置いて貰ひたいよ。（寫眞を拾つて
マスロワに渡す）

マスロワ （寫眞を渡されて見るともなくそれを見込む。そして聲をあげて泣く）あゝ！ な
ぜあの時死なゝかつたのだらう？ なぜあの時死なゝかつたのだらう？ （寫眞を抱いた
まゝ横倒しになる）死にたい、死にたい！ 殺して下さい！

ネフリユドフ （倒れたマスロワをちつと見おろし、靜にその側によつて扶け起こす。マスロワ又酒の瓶を取つてベンチに腰をかけ飲まんとするのを、ネフリユドフ後から肩に手をかけ）お前の體まへが汚れてゐやうがゐまいが、そんな事は私に取つちや何でもない。私がお前と結婚けっこんしようといふのはその體の中に眠つてゐる、お前の靈魂を呼び覺ましたいからだ。お前の靈魂を今一度昔の清いカチューシャにして、そのカチューシャと結婚したいのだ。お前をシベリヤから救すくふだけが救ひぢやない。私のこの心持をよく呑み込んでお呉くれ。私はもう、世間並みの結婚ばなしなども斷つて、堅い／＼決心で來たのだから、かはいさうだと思つて私の願ねがひを聞いて呉れ。分かつたか？（マスロワ次第に顔をあげ前面を見つめる）私は必ずお前まへを救すくはなくちや置おかないよ（マスロワうつとりとなつて、瓶を取り落とし立ち上る。看守入口から顔を出し）

看守 公爵こうしやく、どうしたのですか？ もう時間が切れましたよ。

ネフリユドフ （カチューシャを見つめて）また來るよカチューシャ。

（看守のゐる方へ出て行く。マスロワは失神したやうになつて正面上を見つめたまゝ彫像の如く立つてゐる）

…幕…

第四幕

監獄内の病院の一室、白い壁、正面中央に窓、其左右には薬品棚など、横両方に入
口、室の中程、稍上手かみてよりに大きな木地の角かくテーブル、其の上に薬瓶、乳鉢など置いて
ある。テーブルの周圍に二三脚の椅子。マスロワとフォードシア椅子に腰をかけて丸
薬を揉み居る。

フォードシア　でもよく酒も煙草も一どきに止よされたわね。

マスロワ　もとから好きすで呑のみ出した譯でないからだらうさ。

フォードシア　だつて、あんなにうまさうに呑のんだものを急に斷つて了たふつてのは、大抵たいていのこ
とぢやないと思ふわ、あの方の眞實まことが通つうじたのだわね。全くあの方は親切かたなお方かたね。私わたしま
でお蔭かげでこんな樂が出来て、私これなら、斯かうして姉さんと二人でゐられるのなら、三年
や四年の懲役なげぐらゐ何なんでもないとと思ふわ。こんど公爵きよくさまが入いらしたら、お禮を言はせて
頂戴ごんごんな？

マスロワ　あゝ、お禮をお言ひ。本當にあの女囚じよしゅうしつ室からこゝへ來ると清々することね。薬の香
ひだけでも胸がすくやうだしこんなにもまた白い前掛まへかけをかけて……私、前掛まへかけをかけるのはほ

んとに久しぶりよ、十年ぶりよ、こんなさつぱりした風ふうをしてみると、何だか昔のカチュ
ーシヤに戻もどつたやうで、うれしくてたまらないのよ。

フォードシア え、昔の姉さんに戻もどつてお了おひなさいよ。私お話を聞きいただけでも、其の頃の
姉さんが懐なつかしいわ。

マスロワ 私だつて、あの頃が懐なつかしいけれど……、私だけ昔に戻もどつても、傍はたがさうでなけれ
ばつまらないわね。

フォードシア ネフリユドフ様だつて、さうに違ちがひないのよ。姉さんを、昔の清きよい姉さんに引き
戻もどさうと一生懸命骨折ほねおつていらつしやるのよ。姉さんはほんとに仕合あわせですわ。

マスロワ だけど考かんへて見みると、その間の十年は長いわねえ！ 變かつたわねえ！ これでもた
舊もとの私に戻もどれるものか知ら？ 世間がさうさせて呉くれるか知ら？

フォードシア それは姉さんの心こころがけ一つよ……ねえ、姉さんはいつか、あの方と分わかれた時の
話をしましたつけね？ なぜあんな親切な方が、も一度ひとその別莊べつじやうへいらつしやらなかつた
のでせう？

マスロワ それはね、戦地せんちからの歸りかへりで、寄る暇ひまが無なかつたといふのよ。それで私は、夜よるわざ
く 停車場ていじやうばまで逢あひに行いつたつけが……

フォードシア さう？ で、逢あへて？

マスロワ　私だけ一目見たけれど、それなり別かれて了つたのさ、あゝ、あの時ほど悲しい、情ない思ひをしたことはなかつたつけ。あの時私は、ふつつりと世の中が頼みにならないものだと思ひ切つたのだよ。

フォードシア　どうしてさ？

マスロワ　其のころは私ね、まだ何も知らないものだから、お腹の子どもの事を思ひ出しては、嬉しいやうな心配なやうな氣持で毎日々あの人の歸つて来るのを待つてゐたのよ。叔母さんたちも歸りには是非寄るやうにと手紙を出して、待ち暮してゐると、こんどは、規則で中途に寄り道することは出来ないと言報を打つて來たのさ。

フォードシア　まあ！

マスロワ　だから私、是非會つて置かなくちやならないと思つてね、汽車の着くのは夜の二時だといふから、みんな寢たあとで料理番の娘を連れて、肩掛を頭からすつぱり被つて、停車場へ駈けつけたのよ。

フォードシア　大抵の事ぢやないわね。

マスロワ　其の晩は生ぬるい風が吹いて、大雨が降つた後の闇夜でね、近路をしようと思つたのが、すつかり迷つてしまつて、停車場へ着いた時はもう發車の二番目の鈴が鳴つてるぢやないか？　だものだから、私、あわてゝ、プラットフォームに駈け込んで、一等室の前ま

で行くと、中にはランプや蠟燭が目ばゆいやうにともつてゐて、二人の士官は天鷲絨の椅子に倚りかゝつて ترامプをしてゐるし、あの人はきちんとした装で、椅子に肱をもたせて笑ひながら巻煙草を吹かしてゐたの。

フォードシア　で、向うでも姉さんに氣がついたの？

マスロワ　いゝえ。私、其の平氣な顔を見ると腹が立つやうな、懐かしいやうな、何ともいへない氣持になつて、いきなり拳で窓を叩く拍子に、列車はがたつと揺れて動きはじめたのよ。

で、はじめは、せめて一言でもと思つて、其の箱と並んで走つてゐると、内から其の様子を見た一人の士官が硝子戸を明けようとして、しきりとがた／＼させたの、するとあの人も窓の側へやつて来て、二人でがた／＼やつてる内に汽車は段々早くなり出してやつと窓の明いたときは、もう間に合はなかつたのだよ……（涙ぐんでうつとりとなる）

フォードシア　それから？　それから？

マスロワ　私がまだ一生懸命に追つかけてるものだから、驛の役人がやつて来て、引き戻して了つたのさ。私は雨で濡れてるプラットフォームから、危なく滑り落ちやうとしたのを、やつとの事でこんどは線路へ降りて追つかけたけれど、どうすることも出来やう筈はないし、水槽の所まで来たときは、肩掛は風に吹き飛ばされて、裾は泥と水でべた／＼になつてゐた。それを、あとからいきせき追つついて来た娘が聲をかけたものだから、私は始め

て氣がついて、べつたりそこに坐つたなり、泣き出しちやつたのさ。

フョードシア 私も泣きたくなつたわ。

マスロワ づぶ濡れになつた娘も縫りついて泣くし、二人暗い中で、あの時こそしみぐ泣いたよ。あの人はあんな氣樂な眞似をしてゐて、私はこゝで斯うして土の上にすわつてゐると思ふと、なぜだかふつと生きてるのがいやになつてこのまゝ汽車に轢かれて死にたいと思つたよ。けれど、その娘にせがまれて夢のやうに家へ歸つて來た。

フョードシア でも、よかつたわね。

マスロワ あくる朝まで考へて、お腹の子どもがかはいさうだと思ふと、また氣が折れて了つて、今日まで斯うして生きて來たのさ……だけど、その時から、私やふつとりと、神さまも人間も頼みにしない氣になつたのよ……

フョードシア もう其の話はやめませうね。また十年前に戻れるのだから……

マスロワ 考へて見りや、あの方ばかりが悪いのでもないわね。それに今ぢや、あんなにして下さるものを、こなひだは私はほんとに濟まない事をしたよ、こんど逢つたらお詫をして置かう。

フョードシア 私また、姉さんへ教はつた歌を歌つてあげませうか？

(ネフリユドフ、小使に伴はれて入り來たる)

マスロワ (うれしげに走り寄り、手を出して握手し) よくいらして下さったのね。丁度今も噂をしてゐたのですよ。フォードシアが一度お目にかゝつてお禮が申したいのですつて。

フォードシア あなたが公爵でいらつしやるのですか? (ネフリユドフの前に膝をついて。私、お禮の申しやうもございませんわ。ほんとに――ありがとうございます。どうぞいつまでも――姉さんのお傍にゐられるやうになすつて下さいまし。

ネフリユドフ(フォードシアを立たして) よし――、そんなに禮なんかいふ程の事ぢやないよ。つまりあなたの心がけがいゝから。病院でも許して呉れたのさ。

フォードシア いゝえ、みんな公爵さまのお蔭でございますわ。ぢや姉さん、私ちよつと看護婦部屋へ行つて來ますわ。

マスロワ さう?

フォードシア 公爵さま、御免遊ばせ。(禮をして出て行く、ネフリユドフうなづく)

ネフリユドフ 今日(けふ)はね、控訴の結果が分かる筈で、こゝで辯護士のファナーリン君を待ち合はす事になつてゐるが、お前もこゝへ移つてから、もう可なり日數が立つたから、大分馴れて來たらうね?

マスロワ　え、馴れて來ました。實は早くお目にかゝりたいと思つて待つてゐました。

ネフリユドフ　何か用が出來たのか？

マスロワ　用事つてほどの事でもないのですが、ほんとうに伺つて見たいと思ふことがあつたのですよ。

ネフリユドフ　ふむ、何だらう？

マスロワ　ほんとうに伺つて見たいと思つたのはね、……何だか時々自分で獨り極めにそんな事を思ふものですから……まあよしませう。また此の次にうかゞひませう。それよりか、あなたは、あれからずっと田舎へ行つてらつしやいましたつてね？

ネフリユドフ　あ、私はね、今度の跡しまつの爲に久しぶりであの別荘へ行つたよ。そして其のついでにお前の伯母さんといふのに逢つて、子供の墓も尋ねて來たよ。

マスロワ　よくお墓が分かりましたねえ。伯母さんはまだ達者でゐましたか？　私も行つて見たいわねえ。どんなになつてゐるでせうねえ！

ネフリユドフ　別荘にはもうチホン爺も居ないでね中學生上りの若い男が留守番になつてゐて、建物は恐ろしく荒れてるし、屋根の鐵板の剥げたなりになつてゐる所などもあるし、煉瓦塀の上には草が一杯生えてゐた。それから裏庭つゞきの林檎や櫻の林はね、ちやうどこぼれるやうな花盛りで、あの垣根の接骨木の花も昔のやうに香つてゐたよ。

マスロワ あゝ、私、もう一度自由な身みになって見たい！（うつとりとなる）

ネフリユドフ それからあの、よく氷の裂さける音のした川では、パチャ／＼洗濯する音が聞きこえてね、あの窓に顔を突き出してゐると、和やはらかな風が吹いて来て、しんとした中に蜂のうなり聲が聞きこえてゐたよ。

マスロワ もう雪は無なかつたのでせうね。

ネフリユドフ 無論さ。そしてね、私はやつとの事でお前の伯母おばさんの家を尋ねあてゝ、逢あつて見たよ。お前の事をよく覚えてゐたよ。

マスロワ あゝ、昔の自由な身みになりたい！ ……そして本當にかなふ事なら……

ネフリユドフ 私は誓ちかつてお前を自由な身にする。そしてお前の蘇よみがへった心で私と一緒になつて呉くれれ。

マスロワ それがかなふ事でせうか？……

ネフリユドフ かなうとも。お前の心はさうして今一度清きよい昔に戻るのだ。

マスロワ さうでせうか？ ……けれどだめですよ。一よじど汚れた體は誰れも信用して呉くれないから。

ネフリユドフ （肩に手をかけ、やさしく）そんな事を考かんがへちやいけない。カチューシヤ。

(助手醫入り來たる)

助手　あなた、此の方が面會室で待つてゐられるさうです。

(名刺をわたす)

ネフリユドフ　あ、ファナーリン君が來たのだ。ではちよつと會つて來ます。

(マスロワと助手とに目禮して出て行く)

助手　(マスロワの方に寄つて) お前さんの名はマスロワだつね?

マスロワ　えゝ。マスロワ。

助手　何歳で稼いでゐたの? 此の土地で?

マスロワ　(むつとして) 何處だつていゝぢやありませんか?

助手　以前お前さんの馴染が、お前さんをこゝから救ひ出さうと骨折つてるといふぢやないか? 本當かい?

マスロワ 早くいらつしやらないと、院長いんちやうさんが見みえますよ。

助手 大丈夫、今は誰も來ないことになつてゐるよ。だが、私もそのお馴染なじみさんになりた

いものだね。一たいどんな人だい？ 素敵すてきに身分の高い人だといふぢやないか？

マスロワ ええ、非常ひじやうに身分の高い人よ。

助手 名は何なんといふのだい？

マスロワ うるさいぢやありませんか？ (立つて窓の方へ行く)

助手 そんなにうるさがらなくつたつて、いゝだらう？

マスロワ よかありませんよ。早くあつちへ行つて頂戴はや。

助手 馬鹿にかたぎな事を言ふね。お前さんにも似合にあはないぢやないか？ いくら監獄の

中だつて、おもしろい事も出來できやうぢやないか？ 看護婦さんのお手てつだひなら、少しや

あ我々の方へもお愛相あいさうくならゐしても、損は行くまいぜ。

(女の傍へ行つて腰を抱かうとする。それを振り放して)

マスロワ あんまり人を馬鹿におしなさんなよ。(又テーブルの方へ行き、腰をかけて丸薬を揉も

む)

助手（ついて来て横手から）新米にしちや、揉みやうがうまいね。その粒の切りかたがまづいや。さ、手つきを教へてあげよう。

マスロワ 分かつてゐますよ。（肱で助手を突き飛ばす）

助手 （後から抱きすくめて）この性悪女め、そんなに人をぢらすものぢやないよ。ちよつとでいゝから、まあ私のいふ事をお聞いたらね。今夜ね、あの小さい廊下の戸を明けて置くから、そのすぐつき當りが私の宿直だよいゝかい？ 分かつたかい？

マスロワ （立ち上りすりぬけて）知らないつてばねえ。私、聲を立てゝよ。

助手 お前さん、お小づかひに困つてるやうだから、こなひだから是れを上げようと思つてたのだよ。取つて置いて頂戴（銀貨を握らせようとする）

マスロワ （それを烈しく床の上に投げつけて）人を馬鹿におしでないよ。（助手が捉らへんとする手を振りほぐし、追つかけられるのを逃げ廻る）

助手 いや、おれに肱鐵砲を呉れるつもりだな。見やがれどうして呉れるか？

マスロワ （また捉へられて）放さないか？ 放さないと蹴とばすよ。畜生！ 畜生！

（振りはなすはづみに、テーブルの上の物を床に落とす。騒音。その途端に下手口から醫長、ネフリユドフとファナーリンとを伴ひ入り来る）

醫長　　こら？　何をなにする？　なんだその騒さわぎは？

助手　　（びつくりして）先生、どうも困こまりました。この室へはいるとすぐ此のざまですから

ね、實際あきれて了ひます。大抵様子で分つてゐませうが……どうも明あからさまに申上けるのも極まりがわるいやうでどうかお察しを願ひます。ちよつと油斷して優やさしい事を言ふと、もうすぐこの通りの事をしかけるのです、どうしてく、なかくの女ですよ。

醫長　　一たい君きみ、何をなにしたのです？

助手　　何つて、どうも驚おどきました。私が丸葉の揉もみかたを説明してゐますと……此の女がだしぬけに私わたしに接吻しようとするのです。

マスロワ　　まあ！　大嘘おほうそつき！　嘘ですよ嘘ですよ。

助手　　嘘なものですか？……こなひだから私につきまといつてる様子が、何か私をだまして、便宜べんぎを得やうとでもしてゐるらしいのです。

マスロワ　　（泣き聲になつて）あんな卑怯ひげふな、自分でした事を私に塗ぬりつけて、大嘘つき！　大嘘つき！

醫長　　黙もくんなさい！　……そんなに騒さわいぢやいかん。それよりかそこらに落ちてゐるものを片づけなさい！

助手 本とうに此の女には驚きました……

議長 もういゝから、君もあちらへ行きたまへ。君の部屋へ歸つてゐるが、マスロワ、お

前はもう此處を出るのだぞ！（大きな眼鏡越しにけはしくマスロワを見る。そして入口に立ちすくんでゐるネフリユドフを顧みて）かういふ種類の女は、どうも困りますね。公爵。

ネフリユドフ 分かりました、分かりました。ではどうか暫くこのまゝになすつて下さい。

（議長出て行く）

マスロワ （おづ／＼と寄つて来て）御免なさい？ 私、あの騒ぎでびっくりして了つたのですよ。

ネフリユドフ （冷かに）これが辯護士のファナーリンさんといつて、いろ／＼お世話になつてゐる方だ。（マスロワ辭儀をする）

フリーリン 今日はおもしろくない知らせを持って來たのですよ。控訴は却下されて了りました。マスロワ 私、そんな事ぢやないかと思つてゐました。今さらしようがございませぬわね？

ネフリユドフ 併しほかにまだ方法があるから、失望しなくてもいゝ。こんどは直ぐ上訴して特赦

を願ふことにするのだ。

ファナーリン 裁判の形式に手落ちがあるのですから、取り消すことの出来る裁判です。氣を落とさないでおいでなさい。

マスロワ (ネフリユドフに) 私、もうその事はどうでもいゝと思ひますから、この上あんまり御心配下さらないようにね。どうせもう、斯うなつた私ですから。それよりか、私、お願ひがあるのですよ。私は今の騒ぎで、また舊の檻房へ入れられるのでせうけれど、あれは決して私がしたのぢやありませんから、どうかそれだけはね、悪しからず思つて下さいな。

ネフリユドフ あゝ、もうそんな事を言ふ必要は無ひつえういよ。お前が何をしようと、それはお前の自由むかしさ。私はどんな事があつても、一旦きまつた以上、お前を救すくふといふ決心は變らないから。

マスロワ あなたまでがそんな事をおつしやつちや、私の立つ瀬せがありませんわ。ねえ。悪く思はないで下さいな。あの助手めが私を見くびつて……

ネフリユドフ もういゝ、もういゝ。

ファナーリン どうも困こまつたものですね。

マスロワ 私わたし、どうしたらいゝでせう？ (兩手を顔にあてる)

ネフリユドフ (あはれみの眼で見、其の手をおろさせ) もうそんな事ことはいゝといふぢやな

いか？

フアナリーリン ではともかくも、此上訴書類に署名しよめいして下さい。

マスロワ どこへですか。私、手がふるへてゐて書けさうもありませんわ。(襟巻の端で涙を拭ひ、啜すり泣きながらテーブルに寄りうつむいて名を書く。辯護士は其の箇處を指定してゐる)

ネフリユドフ 上訴の結果の分わかるまでには、手間取るだらうから、お前は多分この十日の護送隊に這は入つて、シベリヤへ行かなくちやなるまい。併し特赦されれば、すぐ歸つて來られるし、私もお前の隊について行くから宿場しゆくば々々では會へるだらう。一時の事だと思つて辛抱して呉れ。

マスロワ え、もう、私わたし、その事はちつとも苦くにしてゐませんから、どうか御心配下さらな
いようにね。シベリヤへ行ゆかうがこゝにゐやうが、どうせ私に取とちや同じ事ですから。
ネフリユドフ 途中でいるものを考かんがへて置いて呉れ、持つて行ゆけるだけは買かひととのへるから。
マスロワ 何なにもいるものはありませんわ。

ネフリユドフ シベリヤで逢あふまでは、これでまた當分逢へまいから何か私に言つて置くことが
あるなら……

マスロワ 何なにもございませぬ。

ネフリユドフ　では是れで用が済んだから、私等は歸るよ。

ファナーリン　公爵、私は一足お先へ失禮いたします。

ネフリユドフ　いや、私も御一緒に行きませう。さやうなら。

マスロワ　さやうなら。

（マスロワは離れて立つたまま二人に挨拶し、其の出て行く後姿を見送つて、テールブルの前にぐたりとなり、淋しく頬杖をついて考へ込む。フォードシアが這入つて来る）

フォードシア　（マスロワの傍へ行き覗き込んで）檻房へ歸るのだつてね？　私よく知つてゐま

すわ、姉さんが悪いのぢやない、みんなあの助手の奴が悪いのです。あいつが不斷してゐた事を、なぜ姉さんは言ひつけてやらなかつたの？

マスロワ　もう何も言はないことにしたのさ。私たちの言ふ事を信じて呉れるものは、世間に一人もありはしないのだから、

フォードシア　でも、公爵だけは信じて下さるわ。

マスロワ　だめなの。誰も信じちや呉れないの。……それもその筈だわね。私たちのやうにな

つたものは、實際自分で自分を信じることさへ出来ないのだもの、私ね、一ど、或るお祭り
の晩だつて、そんな身の上がつく／＼いやになつて、同じ家に居たピアノ弾きの女に其
の話をすると、其の女もひどく自分の身をはかなんで、二人一緒にそつと家を出る相談を
極めたのさ。そして支度をしてゐると、そこへ男どもが大浮かれて上つて来て、ヴィオリ
ンを弾く男は曲弾を始めるし禮服を着た大男と髯武者の小男とは私とピアノ弾きの女をつ
かまへて踊り出すしさ。とう／＼夜どほし踊つたり唄つたりして、あくる日からはまた元
の通りさ。逃げ出す相談なんか何か何處かへ行つちやつた。何が何だか分かつたものぢや
ないのよ。

フォードシヤ 公爵は何か用があつていらつしやつたの？

マスロワ 控訴がだめになつて、私はこの月の十日にシベリヤへ行くのだとさ。

フォードシヤ まあ！ 何うしたのでせうね？ いや／＼さうと極まつたら、私も姉さんと一
緒に行きたいわ。

マスロワ そんな事が出来るかどうか分かりやしないよ。私ね、お前さんにかたみが上げたい
のよ（棚の隅から小函を取り出す）私が是非シベリヤへ持つて行かうと思ふのは此の小函
一つきり。この中にはそら（蓋をあけて品物を取り出す）あの寫眞と、それから昔つかつて
みた小鏡と、それから此の指輪と……此の指輪もあの方に始めて接吻された時の記念よ。

これをお前さんに上げるから取って置いてちやうだい。

フョードシア まあ、どうもありがたう。

マスロワ それから此の赤い花のリボン！ これを差して、あの晩教會へ行つたつけ。こんな風にさしたか知ら（鏡に向ひ昔のやうな身づくりひをして見る）こゝいらが襟飾りで一杯になつてゐて……（鏡の中の姿をしばらく見つめてゐて、がっかりしたやうに鏡を投げ出し）あゝ、もう、昔のカチューシャぢやなくなつた！

フョードシア 私、こんどこそ、あの歌を歌つてあけるわ。（低い聲で）

カチューシャかはいや

別れのつらさ

せめて淡雪とけぬ間と

神にねがひをかけましょか

マスロワ （フョードシアと同音に）

カチューシャかはいや

別れのつらさ

せめて淡雪とけぬ間と

神にねがひをかけましょか

第五幕

(此歌をくり返すあひだに幕がおりる)

シベリヤー寒村かんそんにある驛所の構内。奥は見わたす限り一面の雪の原で、谷の兩側に村のつゞいてゐる遠見。雪のつもつた並樹なみきの向うが道になつて其の道を上手から下手へ、下手から前面へと出て來られる。下手に小屋あり、戸を開け放してある、其の軒下に腰かけ、數個のラムプなど。また上手には岩に寄せてテントが張つてある。時刻は夕ぐれで遙かの空には入日の影が赤く雪に反射してゐる。

奥の道からマスロワ等一隊の囚徒しうとが護送の兵數人に導かれて出て來る。普通犯人はマントを着、國事犯は學生服でゐる。村の男女が、食料品など賣りに來る。囚徒は護送兵の指揮で小屋やテントの中に這入り、焚火などはじめる。

女商人

(他の二三人と下手奥から籃かごなど提けて出て來る) まだ一人も着かないね。この宿へは二三十人も來るか知ら?

男商人一　　こんどは全體で七百人からの囚徒しうとだといふぜ。今にシベリヤは罪人で一杯になるだらうよ。

男商人二　　今夜は少しはいい商賣しやうばいがあるかなあ。

女商人　　今夜は復活祭だから、囚人だつて少しは御馳走をするだらうよ。(上手奥かみてを見て)さあ着いたく。

男商人一　　十四人は居るやうだ。(みなく道の方へ出て見る。警護兵を先に立てた囚人しうとの一隊、並樹の向ふを通つて出て来る)

女商人乙　　さあく、魚うをはいかゞですか？　善い魚ですよ。安くして置きますよ。五錢に負まけときますよ。

女商人甲　　卵はいりませんか？　卵はいりませんか？　新しい卵ですよ、産うみたての卵ですよ。

男商人　　肉菓子に焼豚、素麵そうめんに羊の肝、おいしいものばかりでござい。おいしくて安いものばかりでござい。

(囚人等がやくと寄り來たり、商人等と話す)

護送の士官　　こらく。ここへ來ちやいかん。あつちへ行つて居れ、あつちへ行つて居れ。それ

から囚徒はそのテントと小屋に分かれて、いつものやうに夕飯の仕度をするのだ。

（病人を助けなどして、みなく小屋とテントの中へ這入ったり、戸外に腰をおろしたりする。小屋とテントの中には火が焚え上がる。士官兵士とも去る）

老男囚

（テントの方で）おれはもう駄目だ！ 二十時間もあるきつづけたからもう駄目だ。

老女囚

まあ四五時間はここで休めるんだから、ゆつくり寝て休むがいいよ、お爺さん。

若女囚

（獨語のやうに）虱婆さん！ お前さんも此の間に虱でも取つといてお呉れよ。私たちが助かるから。

マリア

さあく、皆さん、静かになすつて下さいよ。（小屋の方へ行つて病囚に）あなた寒ありませんか？ 蒲團にしつかりとくるまつてお在でなさいよ。今夜は復活祭ですね？

病囚

（屋内で）みなさんが御親切にして下さつて、實にありがたいです。今夜は復活祭です。すね。はく、世間は復活祭でも、私は死んで行くのです（咳をする）

若女囚

あの人、事によつたら今夜が持てないかも知れない。

老男囚

かはいさうだな。

一男囚

(奥の方で)此の柱にナイフで字が彫ほつてあるよ。えゝと「余は千八百八十年八月十七日刑事犯の一行と共に此の所を通過せり。國事犯人は余一人なり。一人の友人はカザンの瘋癲病院にて自殺せり。余は主義のために倒るゝものなり」

マリア 名が書いてありますか？

一男囚 ベルキンとしてあります。

マリア あゝ、其の人の事なら聞いたことがありますよ。

病囚 私なんか、これくらゐの病氣でぐづぐづ言いつちやならないんですね。

マスロワ あゝ、やつと寝ねかしたつた(小屋で言ひながら舞臺の中程へ出て来る)

マリア マスロワさん、どうしたのですか？

マスロワ あの子この父親はもうよつぽどの年ですよ。母親がチブスで死んでから、こゝへ来るまで十日間といふものあの子を抱だきとほして來たのですつて。それをね、意地のわるい護送兵が急に手錠をはめるといったものだから、子供が抱だけないと言つたら、口返答をしなかつたといつて、頬ほつぺたを血の出るまで撲つたのです。そして泣きたてる子供をむりやり引ひつたくるのですよ。私、あんまりかはいさうだつたから、すかして引きとつてやりましした。

シモンソン (奥手から出て来る)子供は静しづまりましたね。

マスロワ えゝ、やつと静しづまりました。私の頬ほぺたを吸すつて眠つて了しまりましたよ。

シモンソン さあ、みんなもう、大抵にして中へ這入つたら何うだね？ 食事の仕度をした方がいゝだらうよ。

(マスロワ、マリア、シモンソンの外皆去る)

マリア マスロワさん。私はあなたにあやまらなくちやなりませんよ。實はね、あなたが斯うして特別に我々國事犯囚の方へ御一緒におなんなすつたのが不平でしたのよ。私たちは無論平等主義ですけれど、何だかあなたと御一緒といふ事が私たちの汚れのやうな氣がして、あんまり打ち解けられなかつたのですよ。それが此のごろから段々、あなたの御經歷に似ず清い立派なお心だと知れて來て、私は實は恥ぢ入つてゐました。シモンソンさんが初めからあなたを大事になすつたのが本當だと氣がつかしました、ですからね、どうか是れからは何もかも打ち明けて、お互に扶け合つて、このかはいさうな囚徒のために盡くしてやりませうね。私の了見の狭かつたのを勘辨して頂戴な。

マスロワ マリアさん、何をおつしやるかと思つたら、そんなつまらない事を勘辨も何もありませんわ。私こそ、こちらへ御一緒になつてから、まるで別の世界へでも來たやうで今まで十何年ちつとも知らなかつた貴い仕事をしてゐる氣がしますの。これなら私、なま

じつかあちらにゐるよりも、罪人になつてこゝへ流された方がよつぽどありがたかつたと思ひます。みなさんの方が世間の人よりもずっと立派な方ですわ。ですからどうか此のさきもみんな御一緒でいろくゝの事を教へて頂きたいのですよ。

シモンソン　もう四年たつと自由になりますから、それまで辛抱して下さい。自由になつたら、一緒にうんと立派な事をして、あれ等のために盡くしてやりませう。我々がこれまで嘗めて來た辛苦艱難の結果を、生かして世の中へ應用してやらなくちやいけません。あなたのその美しい顔にも、随分長い辛苦の痕が見えてゐます。今まではつらかつたでせうが、こゝまで來れば、此のさきもう落ちつこはありませぬ。こゝで新しい生涯が開けるのです。さう思ふと私は愉快でたまりませぬ。

マスロワ　私も此のごろ何だかそんな風に思はれて來ました。

シモンソン　でね、私は……

（この時背後の道を通つてネフリユドフ、一人の士官に伴はれ急ぎ足に這入つて來る。）

マスロワ　（振りかへり見て、ネフリユドフと顔を見合はせ）あ！　ネフリッドフさまが……

(シモンソンの後へ隠れるやうにする)

シモンソン さあ、また二人で病人の着物を乾かしてやらう。いらつしやい。

(シモンソン、マスロワ小屋の中へ這入る)

マリア 公爵、しばらくお目にかゝりません。私もう國へ御歸り遊ばしたかと思つてゐました。

ネフリユドフ いや、トムスクで國からの通信を待つてゐたものですから、四五日遅れました。別に變つた事ありませんでしたか？

マリア はい、變つた事もございません。あのシモンソンさんが、しきりと公爵にお目にかゝりたいといつてゐました。

ネフリユドフ シモンソン君が？ 何でせう？

マリア マスロワさんに關した事ぢやございませんか？ シモンソンさんは、初めからあの方を親身のやうにして大事にしてあげてゐますし、いろ／＼また考へもあるのでございませう。

ネフリユドフ シモンソン君といふのは、實際立派な人物ですね。

マリア　　はあ。あゝして、一度思ひ立つた事は實行しなくちや置かないといふ人ですから、

どうしてもこんな事になります。御承知でもございませうが、菜食論者だものですから、着物まで一切動物の毛や皮は用ひないで、護謨製のものばかり着てゐます。あの人だけに、刑事犯人までが懐いてゐます。それにマスロワさんも實に立派な心がけの婦人になられましたよ。公爵のお骨折はむだぢやございませんでした。

士官　　さあ、もういゝから引つ込みなさい。(マリアを去らせる)公爵いて乾いてゐてお寒うございますな。火がございますか(ネフリユドフ巻煙草を興へる)いや、御馳走さま。あの、閣下がお世話をしているらしいやいます、マスロワといふ婦人は、全く感心な婦人でございますな。

ネフリユドフ　(うるさいといふ風で)さうですかね? さうでせう。

士官　　(腰の水筒を取り出し)コニヤック酒が少しばかりございますが、いかゞですか、公爵? 寒さ凌ぎに一口召し上りませんか?

ネフリユドフ　いりません。(逃げ廻るやうにして)私は酒を断つてゐますから。

士官　　ですか。ぢや私がちよつと失禮して(一口飲んでもとへ収める)併しこの邊鄙なシベリアで高貴のお方と御一緒になるといふのは、實に名譽ですな。いや、全くあのマスロワといふ女は……

ネフリユドフ さうです。どうか君、その女に至急會ひたいのですがねえ。

士官 承知しました。どうぞこちらへ入らつしやい（小屋の入口を覗くとマスロワとシモンソン火の傍で病人の外套を乾かしてゐる。ネフリユドフをそこへ招いて置いて、士官は

禮をして去る）

ネフリユドフ（不快けに入口に立留まり）カチューシヤ私はお前に用があつて來たのだが……

マスロワ（冷淡に）あら、さうですか？（立たうとするのをシモンソンとぐめて）

シモンソン それより先に、私が一つ公爵にお話したい事があるから、ちよつと待つて下さい。

（外へ出て）公爵、私は是非あなたに聞いて頂きたい事があるのですが、お差支ありますまいか？

ネフリユドフ いゝですとも、話して下さい。

シモンソン それはカチューシヤの事ですがね、あなたとカチューシヤとの関係はよく承知して

みますから、一應御相談をするのが義務だと思ひまして……

ネフリユドフ はあ、それは伺ひませう。

シモンソン その御相談と申しますのはね、私とカチューシヤとの関係を一應耳に入れて置きた

いと思ふのです。

ネフリユドフ（段々心配げに）とおつしやるのは？

シモンソン 實は私があれと結婚けっこんしたいのです。

ネフリユドフ (驚いてぢつと見みつめ)ふむ! それはカチューシヤも同意ですか?

シモンソン まだカチューシヤの意志いしは聞いて見ませんが、これから打ち明けて聞いて見みようと思ふのです。

ネフリユドフ (冷かに)それなら、私の闘たたかう事ではありますまい。カチューシヤの心こころ一つで
きまる事です。

シモンソン それはさうですが、併しかし、あなたの許ゆるしが無ければ當人だつて、自由な返事は出来
ますまい。

ネフリユドフ どうして?

シモンソン つまりあなたとの關係がはつきりしない内うちは、どちらへ行くことも出来ないのです。
ネフリユドフ 併しかしその問題もんだいはもうきまつてゐます。私は私の義務と信しんずる事を行つて、カチュ

ーシヤの負擔ふたんを輕かくしてやれば濟たすむので、そのためにあれの自由じゆうを束縛そくわくする必要はありま
せん。

シモンソン それはさうでせうが、併しかしあれは、あなたのお世話せわになることを望のぞまないやうです。

これだけは間違まちがなからうと思おもひます。

ネフリユドフ 別に世話せわをするといふ譯わけぢやありません。

シモンソン　でせうが、カチューシヤは、あなたの折角せつかくの御好意も飽あくまで受けない決心けつしんをります。

ネフリユドフ　それなら、何も改なめて御相談ごさうだんなさる必要ひつえうはないぢやありませんか？

シモンソン　所ところがカチューシヤは、あれの思おもつてる通りとおりにあなたもなつて頂たまきたいと望のぞんでゐるのです。

ネフリユドフ　といふのは、私が爲ななくちやならないと信まじてゐる事をやめて呉くれといふのですか？　それなら無理無理といふものです。私は私の義務ぎむとしてするのですから、先方きぼうの希望きぼうでやめるといふ譯わけには行きません。併ともし君きみ、お互おたがひにこんなつまらない話はもうやめやうぢやありませんか？

シモンソン　いや、大事だいじな事ことですから、どうかよく聞きいて下さい。それでは、あなたは、カチューシヤの一身いしんに關かしては、手てをお引き下さるのですね？

ネフリユドフ　それはカチューシヤがいやだといふのならしかたもありません。

シモンソン　ではあれにさう言いひませう。

ネフリユドフ　私わたしがあれに話はなさなくちやならない事ことがあるのです。

シモンソン　公爵こうかく、私は決けつしてカチューシヤの色いろに溺おぼれて斯あんな事をいふのではありません。誤ご解くして下くださらないように。私はたゞ彼あれを苦勞くろうした立派りつぱな婦人ふじんとして愛あいするのですから、

どうかして、あれとこれから半世の苦勞を分かちたいと思ふのです、あれの行くところは、何處へでもついて行つて、あれの重荷を軽くしてやりたいと思ふのです。

ネフリユドフ カチューシヤが君のやうな立派な保護者を得たのはあれの幸福です。

シモンソン ではどうか、其の幸福のために、私とあれと一緒にすることを御承認下さい。

ネフリユドフ 私は何と御挨拶していか分らないが、とにかくカチューシヤに来るように言つて下さい。直接話して見たいと思ひますから。

シモンソン (うなづいて入口の所へ行き) カチューシヤ! カチューシヤ! (呼びながら中へ入る)

(マスロワ出で來たる)

マスロワ (おづ／＼と出て來て、冷やかに) 何か何用ですか?

ネフリユドフ (カチューシヤの手を取つて) カチューシヤ、今日はいろ／＼話したい事がある

よ。だが何よりも是れが一番さきだ(ポケットから書類を取り出し) 今度いよ／＼お前の
上訴が聞き届けられたよ。今日この書類がファナーリン君から届いた。斯う書いてある。

「請願局長は皇帝陛下の思召によりカチューシヤ、マスロワが受けたる徒刑二十年の宣告

を破棄し、シベリア附近の地方に於いて一年間の流刑に處す」ね、これでつまり特赦と同じ事になるのだ。

マスロワ　ぢや、こゝまで來なくてもよかつたのですかねえ！

ネフリユドフ　とう／＼私たちの望みが之れで半分成就した譯だ。お前は特赦になった。

マスロワ　私ひとり他へ行かなくちやならないのでせうか？

ネフリユドフ　それはお前の自由だが、その前にお前に聞かなくちやならない事がある。私は今シモンソン君からお前の身の上について相談を受けたよ。

マスロワ　（うつむいて）何んな相談？

ネフリユドフ　シモンソン君がお前と一緒にになりたいといふのだ。（言つて思ひに沈む、しばらく間を置いて）お前が承知さへすればいゝのだから、それにはまづさきに私とお前との關係をはつきりさせて呉れといふのだ。

マスロワ　あなたと私の關係といひますと？

ネフリユドフ　私はこれまでも言つた通り、お前の體を救つた上でお前と結婚しようと思つてゐた。そしてお前も一時はあんなにして怒つたが、併し段々私の心持を解して呉れて、二人の結婚といふことが全くの空想でもないやうに見えて來た。そこへシモンソン君が這入つて來たのだから、お前は今、私とシモンソン君と、二人に一人を擇ばなくちやならない地

位に立つてゐる。つまり私と結婚して呉れるか呉れないかといふ問題を決めればいゝのだ。お前はどいふ氣でゐるか？ シモンソン君とも親しくしてゐるやうだから、どうか本當の決心を聞かして呉れ。

マスロワ (途方にくれた様子でしばらく黙つてゐて) 私の決心でそれはもう、疾とくに決きまつてるぢやありませんか？

フリユドフ 何う決きまつてゐるのだ？

マスロワ 私のやうなものが、今さら人の妻つまになれつこはありません。私は一生獨りで暮ましませす。

ネフリユドフ カチューシャ、それはお前まへの心得違だ。何でお前が人の妻つまになれない譯があらう。マスロワ いゝえ、こんな體からだで結婚するのは、其の人の顔をつぶすやうなものです。愛あいしてゐる

人の顔をつぶしてすむものぢやありません。

ネフリユドフ ではお前はシモンソン君を愛あいしてゐるか？

マスロワ ……はい、愛あいしてゐます。

ネフリユドフ あゝ、やっぱりさうだつたか？ お前もシモンソン君を愛してゐたのか？ ……そ

れでは私をどう思つてゐて呉れるか？ 私はお前に取とつちや何ういふ立場にゐるのかい？

マスロワ あなたと御一緒になることも無論お斷りいたします。

ネフリユドフ シモンソン君は、お前があれと結婚することを望のぞんでゐると言つたよ。

マスロワ さうですか？（沈黙の後）さうです。本當は私、あの人ひとと一緒にになりたいのです。あなたには長くお世話になりましたけれど、どうぞ悪あしからず思つて下さいまし。シモンソンがそんなに言つて呉れますなら、私、あの人ひとと結婚した方がいゝと思ひますから。

ネフリユドフ それはお前本當かい？ 本當に考へてした決心かい？ 無論シモンソン君も立派な人物だから、それと結婚するのはお前の幸福かも知れないが、私もこゝまでついて來たのだから、お前の最後の言葉が聞きたいよ。

マスロワ 私、シモンソンと一緒にしよなります。どうぞそれを許して下さい。

（沈黙）

ネフリユドフ きつと決心けっしんしたのか？

マスロワ はい。決心したのですから、ね、どうか堪忍して下さい。

ネフリユドフ ふむ、思おもひもかけない事だつたね……ぢや、どうも仕方はない、さうするがいゝ。

私の長い務めはこゝでお仕舞しまひになるのだね？ あゝ、長い旅だつた！ それでは私はもう

こゝに用の無い身だから、今夜にもすぐ跡へ引き返さう。お前の幸福を祈つて置くよ。カチューシャ。

マスロワ どうも済みません。

ネフリユドフ お前の将来はシモンソン君に頼むから、私の仕残した務めを果たして貰ひたい。

マスロワ あの人と一緒に、あなたのお志を守つて行きます。

ネフリユドフ どうかさうして呉れ。では、之れで永いお別れになるのだね？

(両手を取る)

マスロワ えゝ、永いお別れに。

ネフリユドフ そしてこゝで、私の義務も、お前の愛も、一緒に終つて了つたのだ。さやうなら、

カチューシャ (両手を取つたまゝ、ぢつと見る)

マスロワ (突然男の胸にすがり) あゝ！ 私、このまゝぢや別かれられません、このまゝぢや

別かれられません。どうして私の愛がこのまゝ消て了ひませう？ 私はまだあなたを愛してゐます、あなたを愛してゐます。愛してゐればこそあなたと結婚することをお断りしたのです。

ネフリユドフ カチューシヤ！ カチューシヤ！

マスロワ あなたが始めて監獄へいらつしやつた時は、たゞ譯わけもなく憎くて、殺して了ひたい程に思つたのですが、今いまぢやもう、そんな心は無くなつて、昔よりも、もつと大切なあなたになりました。酒も煙草も斷つて、あなたのおつしやるやうに、段々昔のカチューシヤにもと戻りかけて來たのもみんな其のためですよ。

ネフリユドフ カチューシヤ！ カチューシヤ！

マスロワ それで時々は、ひよつとかすると、あなたのお言葉通り夫婦ふうふになつて、楽しい日が送れるものかと、己惚うぬぼれてゐたことがありましたが、それは私の料見りょうけんちがひでした。一度汚れた身は、傍はたがそんな事をさせません。あの病院の事があつてから、私はふつ／＼己惚うぬぼれの夢なんか見ないことにしたのですよ。

ネフリユドフ あれは私が至らなかつたからだ、どうか許して呉れ。

マスロワ 許すの、許さないのといふお話ぢやございません。私に取つちや、それがみんな悟さとりの道になつたのですから、今ぢや誰も怨んぢやゐりませんの。

ネフリユドフ では、今でもお前は私を愛あいして呉くれるか。

マスロワ 愛してゐます。深く／＼愛してゐます。ですから、私、どうしても此の體ていであなたと御ご一緒しよになることが出來ないのでですよ。私はどんなつらい思ひしても、あなたのお身に

累ひをかけちやならない。

ネフリユドフ 併しそれは私が承知の上だから、救はれた體に累ひも何もある譯はないぢやないか？

マスロワ いえ、いえ、いくらあなたは御承知でも、それをさせては私がすみません。これだけは何んな事があつても思ひ切らうと決心したのですから、どうぞ其のまゝにして置いて下さいな。途々も、お目にかゝつて親しくすればするほど執着が残ると思つて、なるだけよそ／＼しくして來たのですよ。

ネフリユドフ お前の志は實にうれしいが、そんなにしてシモンソン君と結婚して、これから後幸福に暮せるだらうか？

マスロワ それはもう心配しないで下さい。あの人はあんな立派な人ですから、私の心はよく呑み込んでゐて、少しもそれを氣にかけませんし、私だつてこれから、眞心をつくしてあの人の仕事を助けて行きます。その内には自然と幸福な日が來るだらうと思ひますの。

ネフリユドフ では是れでいよ／＼私の用は無くなるのだね？

マスロワ 随分長いあひだ御親切を受けましたわね。

ネフリユドフ お前とシモンソン君とは、やつぱり長くシベリアに残るつもりかい。

マスロワ はあ、どうせ四五年はゐなくちやならないのですから、出來るだけ長くシベリアに

居て、不幸な囚徒のために盡くしてやりたいと思ひます。あなたは？

ネフリユドフ　私も、一度モスクワへ歸つてから、またすぐ出直して北の方へ行き、そこで一生を あはれな人々のために捧げたいと思ふ。萬事の手筈はモスクワで定めよう。

マスロワ　モスクワからこゝまで何のくらゐありませうね？

ネフリユドフ　三千里以上だらうよ。

マスロワ　随分遠く來ましたわね。

ネフリユドフ　あゝ、世界の果までもついて來ようと約束したが！

マスロワ　それから今夜は復活祭でしたね？　あの時から十年のあひだに、随分變つた處で變

つた復活祭をしますこと！

ネフリユドフ　十年のあひだにねえ！　そして今夜が私たち二人の永劫のお別れになるのだ。そして別れ／＼に新しい生涯に這入るのだ……私は是をお前に記念として上げよう。同宿し

たいギリスの紳士が呉れたバイブルだがね、ゆうべ私が偶然明けて見たところにするしがつけてある。馬太傳の十八章だ、ちよつと讀んで御覽。

マスロワ　（書物を取つて燈火にすかして）「其のとき、多くの弟子はイエスに來たつて曰はく、天國に於いて最も大いなるものは誰れぞや？　イエス、幼子を呼び、彼等の中に置きて曰はく、我まことに爾曹に告げん、爾曹心を改めて幼子の如くならずんば、天國に行くこと

を得ず、凡そ此の幼子の如く自ら謙下るものは、天國に於いて最も大いなるものなり。」
ネフリユドフ さう！ ぢや、これでお別れにしよう。もうすぐ十二時だ。さやうなら（言ひながら、カチューシヤを抱き昔のやうに唇に接吻しようとするのを、カチューシヤ額で受ける、
長い接吻）

（この時遠くの寺で復活祭の鐘の音が聞こえる。ネフリユドフ驚いたやうに「キリストは蘇りたまへり」と言つて離れる）

ネフリユドフ ぢや御機嫌よう、カチューシヤ！（言つてすた／＼と逃げるやうに並樹向うの道へ出る）

マスロワ （見送つて）さやうなら、あなたも御機嫌よう！

（ちよつと間を置いて鐘また鳴る、小屋及テントの中から「キリストは蘇りたまへり」といふ聲が幾つか聞こえる。）

マスロワ 淋しくこちらへ向き直つて、「キリストは蘇りたまへり」（沈んで言ひながら次第に

頭を垂れる。)

…
(幕)
…

底本

抱月全集 第四卷

著者 島村滝太郎 遺著

出版者 博文館

出版年月日 昭和4